

COMPOST

vol.03

2022

Archival Research Center, Kyoto City University of Arts



COMPOST | vol.03 | 2022

資料編

目次

2021年度芸資研の活動について

佐藤知久

004

.

芸術資源研究センター | 研究活動一覧

重点研究プロジェクト

006

センターとしての研究事業

012

.

芸術資源研究センター | 2021年度活動報告

重点研究プロジェクト

013

アーカイブ研究会

048

.

よりあいのまとめ

053

.

芸術資源研究センター | スタッフ一覧

057

003

Contents

2021年度芸資研の活動について

佐藤知久

2020年にはじまった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行は、2021年もおさまることなく、4月には第4波、7月から10月にかけては第5波、そして2022年1月現在、過去最大規模の第6波の流行が生じ、芸資研でも予防対策下での活動がづいていきます。ふらっと芸資研に立ち寄ることで生まれる「不要不急」の出会いが減り、オンラインでの研究会が日常となりました。映像による研究活動の共有は、もはや「常識」化しています。芸資研でも今年度、15本以上の動画をYouTubeチャンネルで公開しました。

オンラインの研究活動では、公開や記録を前提にした撮影が行われます。主催側としては、同時配信するかしないか、終了後も公開するかどうかが常に問われます。議論のあいだも、スクリーンのむこうからこちらを見ているかもしれないネット上の「他者」を意識しなければなりません。研究活動が常にアーカイブ化されるという意味では、一見「活動の継承」の役に立っているようですが、ここには一種独特の居心地の悪さ——無駄口を叩きにくく、また相手がこちらの声をどう聞き、どう見ているかが見えない——がある。そのことを忘れないようにしながら、研究を続けています。

そのような意味で、今年度の芸資研のさまざまな活動に、「現物の喪失」や「唯一性の複写」、あるいは「リアリティの縮減」といったテーマが明瞭に響いていることは、とても重要です。芸資研はもともと、流れ去る芸術的な出来事のリアリティをフィジカルに保存するだけでなく、記憶あるいは（とりわけデジタルなメディウムへの）記録の共有によって、芸術を再創造する可能性を追求しています。芸資研にとって、昨年度がコロナ危機への対応準備期間だったとすれば、今年度は、この危機のなかでの活動とその記録

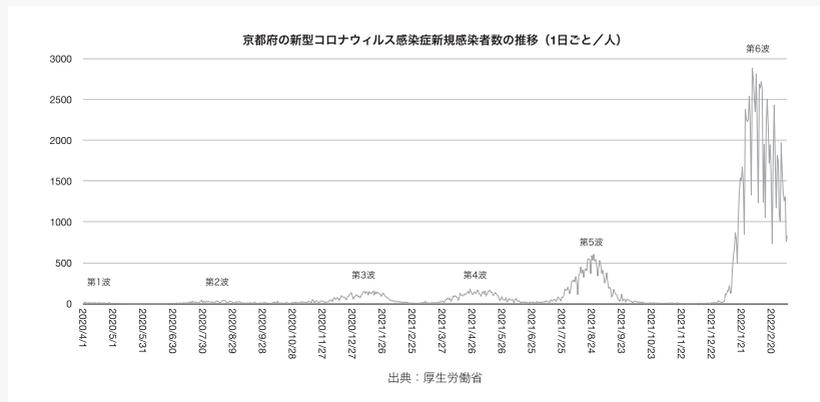
の関係をめぐる、さまざまに具体的な実験と模索の時間だったと言えます。「デジタルな記録の可能性とその限界」「接触が制限される環境下でのフィジカルな経験の成立あるいは共有可能性」をめぐる試行の具体的な内容については、個々の活動報告をご覧ください。

現在芸資研では、個別の研究プロジェクトとは別に、ふたつのプロジェクトを進めています。ひとつは、2023年の崇仁キャンパスへの移転をみすえた、沓掛キャンパスの現状の記録と、これまでの記憶を収集する活動です（京都市立芸術大学特別研究助成「沓掛学舎アーカイブズ」および「Terraceとしての〈京都市立芸術大学芸術資源総目録〉の作成とその共有に関する研究」）。特に「沓掛学舎アーカイブズ」では、卒業生をふくむ大学関係者の撮影した写真とそれにつながる記憶を収集していますので、キャンパスでの風景を記録した写真をお持ちの方は、ぜひウェブサイト「沓掛2023」（<https://arc-kcua.sakura.ne.jp/kutsukake/>）をご覧ください。

もうひとつは、芸資研におけるデジタルアーカイブの設計に関する研究です。「創造のためのアーカイブ」というコンセプトを体現するデジタル・データベースについて、芸資研では開所以来検討を重ねてきました。今年度からは、石原友明教授を研究代表者とする研究プロジェクト「分散型芸術資源アーカイブの理論と実装」が科学研究補助事業に採択され（JSPS科研費・課題番号21H00496）、5か年計画で具体的に研究を進めています。最終的には自律分散的な芸術資源データベースを実際に設計し、試験的に運用する予定です。沓掛キャンパスの記録と合わせ、この科研費プロジェクトについても今後COMPOSTにて報告する予定です。

なお、今年度は芸資研のスタッフにも大きな変化がありました。タイムベースト・メディアを用いた美術作品の保存修復や、ダムタイプ《pH》のアーカイブ作成などに携わるなど、芸資研の中心的メンバーとして2016年度より研究員をつとめてきた石谷治寛さんが、2021年4月より広島市立大学に就職されました。その後任として、アート・メディアーターの埴美智子（はがみちこ）さんが、また新たにデータベース設計の担当として、デジタルアーカイブ／人文情報学研究者の藤岡洋さんが、2021年11月から芸資研の研究員に就任されました。お二人を迎えた芸資研では、フィジカルな場所性・物質性・身体性と、デジタルな記録・情報の可能性の両方を視野に入れた研究活動を、さらにつづけていきます。

最後に、今年度はCOMPOSTにとって予想外の良いニュースがありました。2021年6月、日本書籍出版協会・日本印刷産業連合会が主催する第54回造本装幀コンクールにて、本紀要『COMPOST VOL.1』が、審査員奨励賞を受賞したのです。受賞作品は今後、ドイツで開催される「世界で最も美しい本コンクール」等でも展示される予定です。この場であらためてさまざまな関係者のみなさま、とりわけ執筆者の方々、装幀の松本久木さんと納谷衣美さん、印刷のライブアートブックスさん、製本の渋谷文泉閣さん、版画制作の桐月沙樹さん、そして刷りを担当してくださった方々に御礼申し上げます。



プロジェクト	プロジェクトリーダー	2014 (H26)	2015 (H27)	2016 (H28)	2017 (H29)	2018 (H30)	2019 (H31)	2020 (R1)	2021 (R2)	
京都工芸アーカイブ 少子高齢化による工芸の担い手不足は京都の伝統産業において最も深刻な課題となっています。本プロジェクトでは未来の学生や研究者が、過去を知り制作や研究に活かすことのできる工芸情報をアーカイブすることを目的としています。	前崎信也									
		「京焼海外文庫アーカイブ」の名称でスタート				「京都工芸海外アーカイブ」に変更		現プロジェクト名に変更		
2016-										
美術関連資料のアーカイブ構築と活用										
名画の中の人物や著名人に扮する作品で知られる森村泰昌(1951-)や、仏教美術、京都の文化、また美術作家の作品や展覧会の記録など幅広く撮影し続けた写真家・井上隆雄(1940-2016)らの、各種関連資料のアーカイブ構築と活用について実践的に取り組めます。										
森村泰昌アーカイブ	加須屋明子									
井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究 (2016-2020年度までは山下晃平がプロジェクトリーダー)	正垣雅子									
		「森村泰昌アーカイブ」の名称でスタート				合併して現プロジェクト名に変更		現プロジェクトリーダーに変更		
戦後日本美術と京都芸大—造形表現の継承—	小山田 徹									
2017-										
現代美術の保存修復／再制作の事例研究 —國府理《水中エンジン》再制作プロジェクトのアーカイブ化	高嶋 慈									
2014年に急逝した國府理(本学美術研究科 彫刻専攻修士)の《水中エンジン》(2012年)の再制作プロジェクトの記録と関連資料のアーカイブ化を行います。また、動態的な作品における「同一性」「自律性」の問題や、作品がはらむ本質的な批評性と「再制作」の関係など、この再制作のプロセスが提起するさまざまな問いについても検討します。										
みずのき作品群の保存とアーカイブ作成への協力と作業支援	中原浩大									
社会福祉法人松花苑(京都府亀岡市)によるみずのき美術館(同市)所蔵作品群の保存状況の改善とアーカイブ作成(保存のための再整理作業、画像撮影、作品記録リスト作成、引越し作業等)への協力および作業支援を通じて、「みずのき寮絵画教室」とその作品群の実態調査を行います。(2018年度終了)										
ASILE FLOTTANT 再生〜ル・コルビュジエが見た争乱・難民・避難〜	辰巳明久									
ル・コルビュジエがデザインした 難民収容船のリノベーションが完成することを機に、「ル・コルビュジエが見た争乱・難民・避難」をテーマとした展覧会とシンポジウムを東京で開催した。また、パリのセヌ川に係留されている船の内部で現代日本建築家展を行い、出版も行う。(2017年度終了)										
京都美術の歴史学—京都芸大の1950年代—	深谷訓子・菊川亜騎・牧田久美									
本学の戦後の再出発となった1950年代に焦点をあて、新たに実施された教育カリキュラムについて、美術史・社会史・教育史の横断的観点から研究します。										
2018-										
崇仁小学校をわすれないためにセンター	佐藤知久									
京都市崇仁地区では、2023年の芸大移転にともなって、建築物やモノや風景のありようが、急速に変化しています。記憶を呼び起こす物質的な「よすが」と、それによって喚起される個々人の記憶の両方を創造的に記録・保管・継承する方法を、コミュニティ・アーカイブ的な手法を用いながら実践的に研究します。										
2019-										
美術工芸のリソースに関するアーカイブズの試行	畑中英二									
美術工芸品を形作る制作道具やそれを用いた技は、作品のリソースとして極めて重要な存在ですが、保存活用の手立てに十分な仕組みがありません。そこで、公共機関や地域・所有者などと協働しつつ、資料調査のあり方や実物保存および活用の方向性の仕組みの構築を試みます。										
バシエの音響彫刻プロジェクト	岡田加津子									
1970年の大阪万博で制作された17基のバシエの音響彫刻のうち、これまでに修復された6基の音響彫刻の構造と響きを体系的なアーカイブに残し、部材の劣化を防ぐメンテナンスを施すと共に、まだ復元されていない部材についても調査します。またそれらを用いた新たな創造活動の可能性を探っていきます。										
原版と銅版画作品のアーカイブ	大西伸明									
著作権等の問題から通常は廃棄されてしまう銅版画の原版を、技法・素材など関連資料の記録や、刷られた作品とともに保存することで、高度な技術力を必要とする銅版画技法を継承し、実践的な資料として研究し活用します。										
絵具に問う	高林弘実									
絵画を彩る絵具は、画家が描いた痕跡です。よって我々は、画家が用いた材料や技法、表現の意図、画家がおかれていた状況などを絵具に問うことができます。本プロジェクトは、絵画からより多くを学ぶ環境を整えることを目的とし、保存修復専攻の研究活動によって得られた絵具に関する調査データのアーカイブを目指します。										

プロジェクト	プロジェクトリーダー	2014 (H26)	2015 (H27)	2016 (H28)	2017 (H29)	2018 (H30)	2019 (H31)	2020 (R1)	2021 (R2)
タイムベストメディア作品アーカイブにおける鑑賞性の保存・修復・再創造 芸術資源研究センターで構築したダムタイプ作品《pH》のデジタル・アーカイブと仮想現実（VR）シミュレーターの更なる活用方法に関して研究します。シミュレーター内でのパフォーマンスの再現および情報技術を用いたアーカイビングの技法を探索し、VRによる作品鑑賞を介したアーカイブ閲覧の今日的可能性について検証します。	砂山太一								→
2020-									
歴史的音源で検証する 20 世紀ピアノ/黄金期の音色 歴史的音源と大型蓄音器を使い20世紀前半のピアノ/黄金期の音色の魅力やオリジナルのサウンドで検証します。当時の巨匠達が愛用した欧米のトップピアノメーカーの個性溢れる音色を解説を交えて最高級蓄音器の音で紹介。エラール、ブレイエル、ペヒシュタインなど今や殆ど聴く機会のないピアノの銘器11社の音色の聴き比べを予定しています。	梅岡俊彦								→
THEATRE E9 KYOTO 上演作品アーカイブ 2019年6月にオープンしたTHEATRE E9 KYOTOで上演される舞台芸術を記録し、後世に残していくアーカイブを作成します。そのための方法論と仕組みづくりを劇場と共同で行い、3年後には劇場のみで自律的にアーカイブを続けていける環境を整えていくことを目指します。（2020年度は中井悠がプロジェクトリーダー）	あごうさとし								→ 現プロジェクト リーダーに変更
映像配信のアーカイブ実験室 本プロジェクトを映像の撮影・編集・アーカイブ・配信のための実験室として運営します。動画や写真や音楽（将来的には3D点群スキャン画像など）を、ネットワークサーバー上に構築したアーカイブ・データベースで管理することを通して、過去の資源を再活用する方法を確立します。それらを通して、芸術研をスタジオとし、映像配信とそのアーカイブを蓄積するシステムやワークフローを整備し、開かれた実験室とします。	石谷治寛								→
2021-									
京都芸大国際交流アーカイブ 本学の交換留学経験者に対する聞き取り調査を中心に、その経験を文章化・可視化し、比較可能にすることで、芸術大学における交換留学の多様な特性や効果について理解するためのアーカイブ活動を行います。またその活動を通し、留学参加者以外にも、その効果を波及させる手法について研究します。	金田勝一								→
Stone Letter Project 京都市立芸術大学に約50年間保管されていた日本専売公社で制作されていたタバコのラベル印刷の石版原版約340枚を分類し、明治から「石版印刷」の黄金期に至るまでの石版印刷がどのように展開し、現在のデザインと美術の分野で果たした役割と意義を改めて考察・検証する事を目的としている。それと同時に、京都芸大の教育的資料として記録し、保管・継承する方法を考察する。	田中栄子								→
MIMIC MIMICは、現在活動を続けるアーティストが、自分たちの活動する地域で、当事者自ら行う記録・調査を通じて、既存の美術史におけるアーティストの語り方を考えるためのプロジェクトです。調査者となるアーティストが、対象に選んだアーティストの技法やテーマを「模倣（MIMIC）」し、作品を制作する過程や対象との対話を記録します。	安藤由佳子・岡本秀・熊野陽平								→
日本文化～記憶から伝承へ～ 「日本文化を考える」を主題とし、彬子女王殿下の講義を通して日本文化を様々な視点から学生と共に捉え直し、創作活動へと展開します。	彬子女王殿下								→

センターとしての研究事業

2015

タイムベースト・メディアを用いた美術作品の修復／保存に関するモデル事業

(文化庁平成27(2015)年度 メディア芸術連携促進事業)
せんだいメディアテーク、ダムタイプオフィス、国立国際美術館と連携して実施した事業である。本事業では、タイムベースト・メディア作品の典型として、古橋梯二《LOVERS—永遠の恋人たち—》(1994年)の修復・保存作業を行った。また、海外機関における先行事例の調査を、ドイツ・カールスルーエ市のカールスルーエ・アート・アンド・メディアセンター(ZKM)、イギリス・ロンドン市のテートにて行なうとともに、国立国際美術館との共催で、シンポジウム「過去の現在の未来アーティスト、学芸員、研究者が考える現代美術の保存と修復」を、また修復された《LOVERS》の公開とワークショップ「メディアアートの生と転生 保存修復とアーカイブの諸問題を中心に」を開催した。

2016

タイムベースト・メディアを用いた美術作品の修復・保存・記録のためのガイド作成

(文化庁平成28(2016)年度 メディア芸術連携促進事業)
2015年度に行った《LOVERS》の修復と保存事業を実施する過程で得られた、タイムベースト・メディアを用いた作品の保存・修復・記録についての知見を他の美術作品にも応用できる「ガイド」にまとめた事業である。ガイドは「タイムベースト・メディアとは」「ガイドの概要」「修復／保存の歩み」「資料」「用語集」「保管」「展示」「修復」「リール・デザイン」「来たるべきネットワーク」から成る。執筆者：石谷治寛、小川絢子、加治屋健司、砂山太一、水野祐、山峰潤也。以下URLにて公開中。http://www.kcua.ac.jp/arc/time-based-media/

2017-2018

ダムタイプ(pH)のシミュレーター制作と関連資料アーカイブ

(文化庁平成29(2017)年度+平成30(2018)年度 メディア芸術アーカイブ推進支援事業)
パフォーマンス、インスタレーション、出版などマルチメディアで展開された、ダムタイプの作品《pH》(1990-)のアーカイブ化事業である。「未来において《pH》を再演するとき何が必要か?」という課題を設定し、「再演のためのスコア」としての3Dシミュレーターの作成と、再演に必要な資料のデジタル・アーカイブ化を実施した。2015年から行っているタイムベースト・メディア研究を、生身の身体動作をふくむパフォーマンス作品へ発展させたものである。デジタルなアーカイブの作成に加え、学生や若いアーティストが作業に参加することによる教育的効果や、オリジナル作品の制作スタッフやパフォーマンスと記憶を共有するエコシステムの形成も進められた。

記譜プロジェクト「伝統音楽の記譜法からの創造」

本研究は2019年から引き続き実施しているものである。

主要なテーマは、中国の伝統楽器であり伝統音楽である古琴(琴・七弦琴)の記譜法と伝承の形態についての検討である。

古琴は中国の伝統楽器であるが、日本にも伝来し、平安時代と江戸時代を中心に演奏・継承されてきた。その楽器の特性から、独自の記譜を有してきた歴史があるが、従来の記譜法と近年の演奏方法、特に指遣いに関しては乖離があるのではないかと考えられる。そこで、2019年度から、北京在住で中国の国家級非物質文化遺産古琴芸術代表性传承人である吳劍氏に講演等をしていただいている。

2019年度は本学に招いて吳劍氏に講演していただいた。2020年度も講演を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の流行により、来日が叶わなかったため、2019年度に実施した講演の録画を編集し、公開準備を進めているところである。

2021年度も引き続き、新型コロナウイルス感染症により来日できない状況であるため、吳劍氏が2020年に文化芸術出版社より出版された『古楽尋幽—吳劍音楽学文集』(ISBN:9787503968143)に掲載されている論文「試談古琴減字譜的創制問題」(古琴の減字譜の創造に関する試論)を翻訳することにした。

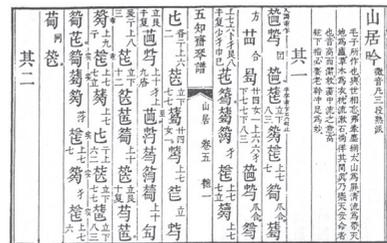
減字譜は古琴の独自の記譜法で、漢字の一部を記号化し、その組み合わせによって奏法を示すものである。唐代以前は文字譜と称されていたが、左右それぞれの手の奏法を文字で示すと非常に煩雑で、長くなるため、唐代中期頃より簡略化した減字譜が発明され、以来文字譜に代わって減字譜が使用されるようになった。宋代以降は完全に減字譜に移りし、現在に至るまで減字譜が使われてきた。近年中国では、伝統楽器の記譜法も変化しており、

数字譜や五線譜を使用することが増え、独自の記譜を使用する機会が減ってきているとの指摘もあるが、古琴は未だに減字譜を利用することが一般的である。ただし、文化大革命(1966-1976)以後、古琴の奏法が変化していく中で、減字譜の本来持つ意味から乖離し、減字譜が奏法をも含めた意味を持っていたものから、単なる記号へと認識が変化したのではないかと推測される。

当該論文は、減字譜の創成に関する考察ではあるが、前提となっている減字譜の本来の意味・意義を再検討するものであると考えている。

現在、翻訳を遂行中でであり、完成し次第、諸手続きを経て、当センターのホームページにアーカイブとして公開する予定である。

(武内恵美子)



琴譜例：五知齋琴譜(1722)《山居吟》(部分)(文化庁文学芸術研究院音楽研究所、北京古琴研究会編『琴曲集成』14巻 中華書局出版、2012)

記譜プロジェクト「音と身体の記譜研究」

本年度、「音と身体の記譜研究」プロジェクトでは「リュート・タブラチュアの記譜法を考える——鳴ると記すのあい」と題した、ルネサンス期のリュート・タブラチュア（奏法譜）に関するワークショップを行う予定である。このワークショップは本来、前年度末に実施を考えていたが、コロナ禍のために無期限延期としたのを、今年度末に改めて企画したものである。

今回のワークショップは、古楽器演奏家、声楽家として活躍されている笠原雅仁氏を講師として招いて行う。笠原氏はすでに前年度末に、延期したワークショップに代えて研究会内で講演をして頂いたが、今回のワークショップはその時の内容におおむね基づいて行われる形となる。

このワークショップの題材であるルネサンス期のリュート・タブラチュアには、休符が記されていない。休符は文章の句読点に相当するが、それが楽譜上に情報として記譜されていないのである。書かれていない情報を、どのように「読む」か。それがこのワークショップにおけるテーマの一つとなる。また、タブラチュアの表面からすぐに読み取ることのできない多声的（ポリフォニック）なテクスチュアをどのように「読む」ということも、もう一つのテーマとなろう。ワークショップのあとには、本プロジェクトの共同研究員である三島郁（音楽学）、本学音楽学部教授・岡田加津子（作曲）と笠原氏とのトークセッションを設け、鳴り響く音響と音を書き記す行為について意見を交換することも予定している。本ワークショップおよびトークセッションの内容については、次号で報告する。

報告の最後に、前年度の研究紀要『COMPOST Vol.2』に記すことのできなかつた、オンライン研究会の内容を簡潔に記しておくたい。

本研究プロジェクトでは、2020年度末（2021

年2月）に非常勤研究員、共同研究員によるオンライン研究会を行った。研究会では、共同研究員の研究発表1本と各研究員の専門領域と関心に結びついた先行研究の内容紹介（翻訳紹介）4本を行った。

岡田正樹の研究発表「日本におけるギター・タブラチュアの普及・利用・意味——ポピュラー音楽と楽譜の関係史」は、ギターのいわゆる「タブ譜」が日本で普及した背景と普及によって生じた変化、そしてポピュラー音楽実践においてどのような意味づけ、価値づけがなされたのかということを中心的な課題としており、20世紀・21世紀におけるポピュラー音楽における楽譜（ノテーション）の意味を再考することを視野に入れたものであった。調査研究の中間報告として行われたその発表のあらましをここで紹介することは避けておくが、いずれどこかにまとまった形で発表されることを願う。

先行研究の内容紹介は、共同研究員の三島郁、井上航、岡田正樹と報告者の4名が行った。三島はLynette Bowring “Notation as a transformative technology: orality, literacy and early modern instrumentalists” (2019) を、井上はRolf Inge Godøyの “Sound-action awareness in music” (2011)、岡田と報告者はFloris Schuilingの “Notation Cultures: Towards an Ethnomusicology of Notation” (2019) について、それぞれ訳文を提示した上で内容を紹介・説明し、その後研究会内で討議を行った。研究会で取り上げた個々の先行研究の概要に関してここでは詳述しないが、今後改めて紹介する機会を持ちたいと考えている。

（竹内直）

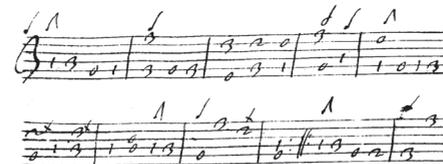
次頁図版：昨年度末に研究会内で行われた笠原氏の講演配布資料より



G. G. Kapsberger / Libro Primo D'intavolatura di Lauto (Roma 1611)



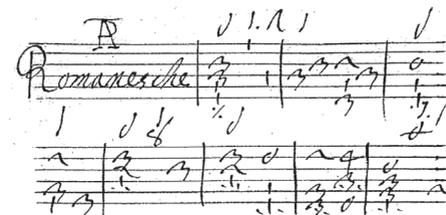
M. Galilei / Il Primo libro d'Intavolatura di Liuto (Munich 1620)



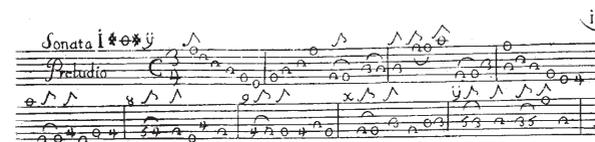
Libro di Leuto di Giuseppe Antonio Doni (Perugia 17C)



A. Piccinini / Intavolatura di Liuto Libro secondo (Bologna 1639)



Intavolature di Chitarrone (Modena 17C)



G. Zamboni / Sonate d'intavolatura di Leuto (Lucca 1718)

総合基礎実技アーカイブ

2014年度から始まった美術学部総合基礎実技のアーカイブ化の作業は、今年で8年目となる。2021年度から常勤教員がつかずに総合基礎研究室の非常勤講師2名が主体となって後期に行くことになり、北浦雄大（漆工専攻出身）、森萌衣（日本画専攻出身）の2名が担当した。作業は各々61時間ずつ、11～12月に計10日間にわたって行った。

本年度の作業目標は、着実な引継ぎ体制の確立にある。それにはシンプルで明解な作業目的と作業方法の設定が要になる。

作業目的は昨年度見直したように、[年代／課題内容／担当教員／学生]の各項目から検索できるアーカイブを総合基礎研究室内に作ることであり、本格的なデジタルアーカイブの公開は、芸資研の情報技術的なサポート体制の樹立次第である。ただし本アーカイブの重要性に鑑み、概要がわかる公開用サンプルデータの準備にも着手する。作業方法の面では、引継ぎマニュアルの再整備に取り組んだ。

これまでもマニュアルはつくっていたが、毎回行うべき作業後の検証を怠っていたため、データの保存方法や各ファイルに対応するID表の作成に不備や不統一が重なり、集積されたデータがアーカイブと呼べるものにスムーズに移行できる状態になっていない。よって今年度は、昨年度の続きとして1989年度のアーカイブ作成を行い、スキミングとそれに伴うデータ処理やID表の作成を実際に行うとともに、1988年度以前のID表の再整理やデータの再処理に取り組んだ[図1]。

また同時に、次年度以降のアーカイブ化の作業をスムーズにするため、今年、2021年度のデータをアーカイブ向けに再整理し、記録フォルダの統一的な構造化を進めた。その過程で判明したのは、2017年度以降、書類や記録が従来の紙やフィルムなど物質的媒

体からデジタルデータに移行し、それ以前のデータの出所による分類が意味をなさなくなっていることである。そのため、アーカイブの分類基準が変わるが、IDの振り分けを次のように改めた[図2]。

デジタル化した各ファイルは、表示用ファイルとして1600pixel四方の軽いjpgファイルに変換し、年度毎のフォルダに一括保存する。それを自動化するボタンをPhotoshopのアクション機能で作成し、効率化を図った。年度毎に表示用ファイルとそれに対応するID表のカップルをつくることで作業が一段落する[図3]。

以下は今年度気づいた細かな点である。1989年のアーカイブ作業では主にネガフィルムの画像に劣化が進んでおり、色調補正作業が重要だと感じた。

2021年度のもは動画資料も多いため、動画の表示用ファイルの画像は動画の一場面のスクリーンショットで作成した。そのため2021年度表示用ファイルには、画像と動画データの画像のみが保存されている[図4]。

1年目の2人の非常勤講師は記録と会計に分かれるが、記録係が授業と同時並行して授業担当年度のアーカイブ作業を行うと効率的であると感じた。

加えて、上記のID表作成の作業において、検索のためのキーワード欄に記す用語の統一が問題となり、「総合基礎実技アーカイブ用語表」の作成を総合基礎実技アカウントのドライブ内で開始した。今後もアーカイブを行う上で気づいた時点で追加、修正を行うことで、用語集は同時に総合基礎実技アーカイブ用語辞典として更新されていくことになる。

総合基礎アーカイブは、課題とつながるキャンパス環境そのもののアーカイブにもなる。移転が迫るなか、作業の着実な継続とさらなる充実が必要である。（北浦雄大・森萌衣）

ID表各項目記入要領

ID	年度	出所 (source)	分類	課題番号	課題 (assignment)	キーワード (keyword)	担当教員 (faculty)	学生 (students)	特記 (notes)
西暦 分類番号 4桁連番	西暦	1.カリキュラム 冊子 2.作品記録冊子 3.フィルム	全体 研修旅行 課題1~5 その他	全体一空欄 研修旅行 課題1~5 =0 =1~5	課題タイトルと内容 (タイトルは文章の ままだと載せる) 例: 届く1 写生からイ メージの展開へ	検索の手がかり。次の3項目を必須に応じて 記入する (1) 小分類 (例:カリキュラム 日程表資料 パンフレット etc.) (2) 課題内容に関わる言葉 (例:言葉の西 遊記の継子 etc.) (3) 材料 (使用する主な材料例:粘土 針金 紙 etc.)	課題担当教員名 (両姓がいるのでフル ネームで記す)	学生名 (作品制作を行った 個人名/グループ名 /クラス名)	わかる範囲で、 ・レクチャー ・作業 (場所) ・合評 ・作品 ・目付 を記入。記入者氏 名も記す。
例: 1972_01_0001									

[図1] ID表各項目記入要領

昭和45年 (1970) ~平成28年 (2016) ID振り分け表

元データは紙媒体・紙焼き写真・フィルムが主体。よって出所ごとに分類。

例: 1971_01_0001

資料分類番号 分類 備考

01	カリキュラム冊子	課題の配布プリント、名簿等
02	作品記録冊子	アルバムのかたちで複数冊あるが、すべて02に統一
03	フィルム (ネガ/ポジ)	課題番号

平成29年 (2017) 以降 デジタルデータID振り分け表

データが紙媒体からデジタルデータに移行したため、それに応じてID振り分け表を課題主に広げる

西暦_資料分類番号_課題番号_データ番号 (四桁連番)

例: 2021_01_0001

課題番号	分類	備考
00	全体	名簿/全体カリキュラム等
01	第1課題	1.書真 2.写真 3.映像 4.学生作品 の区別は分類欄に
02	第2課題	同上
03	第3課題	同上
04	第4課題	同上
05	(第5課題)	同上 (課題数が5以上の場合)
06	(第6課題)	同上
07	研修旅行	展示記録/広報資料/ポスター/チラシ等
08	その他	下見含む
09		アンケート/会計/後期に回した資料等

作成: 井上+北浦+森 2021/12/20

[図2] ID振り分け表の再編

2021年度 総合基礎実技 第1課題

「伝える術」としての美術

2021年4月16日 森萌衣

[図4] 動画データ (mp4) はスクリーンショットで表示用画像データとする。2020年度から始まった動画でのレクチャーのアーカイブは、貴重な芸術資源と思われる。

アクション

- 1. 1600x1600
- 2. 1600x1600.jpg
- 3. 1600x1600.jpg
- 4. 1600x1600.jpg
- 5. 1600x1600.jpg
- 6. 1600x1600.jpg
- 7. 1600x1600.jpg
- 8. 1600x1600.jpg
- 9. 1600x1600.jpg
- 10. 1600x1600.jpg
- 11. 1600x1600.jpg
- 12. 1600x1600.jpg
- 13. 1600x1600.jpg
- 14. 1600x1600.jpg
- 15. 1600x1600.jpg
- 16. 1600x1600.jpg
- 17. 1600x1600.jpg
- 18. 1600x1600.jpg
- 19. 1600x1600.jpg
- 20. 1600x1600.jpg
- 21. 1600x1600.jpg
- 22. 1600x1600.jpg
- 23. 1600x1600.jpg
- 24. 1600x1600.jpg
- 25. 1600x1600.jpg
- 26. 1600x1600.jpg
- 27. 1600x1600.jpg
- 28. 1600x1600.jpg
- 29. 1600x1600.jpg
- 30. 1600x1600.jpg
- 31. 1600x1600.jpg
- 32. 1600x1600.jpg
- 33. 1600x1600.jpg
- 34. 1600x1600.jpg
- 35. 1600x1600.jpg
- 36. 1600x1600.jpg
- 37. 1600x1600.jpg
- 38. 1600x1600.jpg
- 39. 1600x1600.jpg
- 40. 1600x1600.jpg
- 41. 1600x1600.jpg
- 42. 1600x1600.jpg
- 43. 1600x1600.jpg
- 44. 1600x1600.jpg
- 45. 1600x1600.jpg
- 46. 1600x1600.jpg
- 47. 1600x1600.jpg
- 48. 1600x1600.jpg
- 49. 1600x1600.jpg
- 50. 1600x1600.jpg
- 51. 1600x1600.jpg
- 52. 1600x1600.jpg
- 53. 1600x1600.jpg
- 54. 1600x1600.jpg
- 55. 1600x1600.jpg
- 56. 1600x1600.jpg
- 57. 1600x1600.jpg
- 58. 1600x1600.jpg
- 59. 1600x1600.jpg
- 60. 1600x1600.jpg
- 61. 1600x1600.jpg
- 62. 1600x1600.jpg
- 63. 1600x1600.jpg
- 64. 1600x1600.jpg
- 65. 1600x1600.jpg
- 66. 1600x1600.jpg
- 67. 1600x1600.jpg
- 68. 1600x1600.jpg
- 69. 1600x1600.jpg
- 70. 1600x1600.jpg
- 71. 1600x1600.jpg
- 72. 1600x1600.jpg
- 73. 1600x1600.jpg
- 74. 1600x1600.jpg
- 75. 1600x1600.jpg
- 76. 1600x1600.jpg
- 77. 1600x1600.jpg
- 78. 1600x1600.jpg
- 79. 1600x1600.jpg
- 80. 1600x1600.jpg
- 81. 1600x1600.jpg
- 82. 1600x1600.jpg
- 83. 1600x1600.jpg
- 84. 1600x1600.jpg
- 85. 1600x1600.jpg
- 86. 1600x1600.jpg
- 87. 1600x1600.jpg
- 88. 1600x1600.jpg
- 89. 1600x1600.jpg
- 90. 1600x1600.jpg
- 91. 1600x1600.jpg
- 92. 1600x1600.jpg
- 93. 1600x1600.jpg
- 94. 1600x1600.jpg
- 95. 1600x1600.jpg
- 96. 1600x1600.jpg
- 97. 1600x1600.jpg
- 98. 1600x1600.jpg
- 99. 1600x1600.jpg
- 100. 1600x1600.jpg

[図3] 表示用データへの変換とフォルダ振り分けをPhotoshopのアクションで自動化する。表示用フォルダには西暦年のみを記し、すべてのデータを表示用データに変換してここにまとめる。各年度ごとにこの表示用フォルダとそれに対応するID表のペアが総合基礎実技アーカイブを構成していく。

日本文化～記憶から伝承へ～

昨年度にはコロナ禍により開催を見送った芸術資源研究センター客員教授の彬子女王殿下による特別授業を、今年度は対面形式で実施いたしました。今年度からプロジェクト名を「日本文化～記憶から伝承へ～」と改めて、彬子女王殿下の特別授業とプロジェクトが結びつく形としています。彬子女王殿下の特別授業は2018年度から「日本文化を考える」を主題とし、日本文化を様々な視点から学生と共に捉え直す特別講義です。2018年度は「明治の選択」でした。明治の開国によって西洋の進んだ文明と共に西洋文化を受容していく中、日本文化が失われていく様をお雇い外国人たちは嘆きました。同時に、皇室の食事や服装も西洋化されていきます。皇室における西洋文化受容の様子を彬子女王殿下に講義していただき、後世に残したい日本文化を学生から提案していただきました。2019年度は「令和にまなぶ」です。2019年5月1日から始まった新しい元号「令和（れいわ）」は日本最古の歌集である万葉集を典拠に制定されました。「歌会始の儀」で歌を詠まれている彬子女王殿下の経験をもとに「日本文化における歌（和歌）」の基調講義をしていただき、学生に「和歌」をテーマにした制作をしてもらう授業です。

これまで、彬子女王殿下の特別授業は美術学部の学生を対象を限定して実施してきましたが、今回は音楽学部の学生を対象にした特別授業としました。音楽学部の作曲専攻に協力していただき、彬子女王殿下による「日本文化を考える～令和からまなぶ～」の講義を受けて、学生に「和歌」をテーマにした曲を作ってもらった内容の授業です。作曲専攻との日程調整が上手くいかなかったため、陶磁器専攻3回生5名を対象に対面形式で講義していただき、その講義をビデオ撮影して音楽学部作曲専攻の学生に視聴していただく形と

しました。それぞれの専攻の学生は春休みを利用して「和歌」をテーマにした創作に励んでもらいます。

彬子女王殿下の講義は、自身のお名前と身位、宮号、敬称について説明され、令和即位の礼、大嘗祭で自らが身につけた「小忌衣（おみごろも）」について説明されました。次にご自身が「源氏物語」の中でもっとも好きな「玉鬘」の帖「歳暮の衣配り」の部分を取り上げて解説されました。光源氏が女性に歳暮の衣配りを思案する場面です。「源氏物語」は「色」の描写が豊かで美しく、その色を知ることによって物語がより立体的に見えてきます。源氏が配る衣の色から源氏の女性たちへの思いが推しはかられる、非常に面白い場面です。「玉鬘」の「歳暮の衣配り」は、「紅梅」「葡萄染」「今様色」「桜」「掻練」「浅縹」「濃き掻練」「赤き」「山吹の花」「柳」「白き」「濃き」「青鈍」「梔子」「聴し色」と計15色もの色を用い、人物描写や心理描写がされている場面です。続いて源氏物語の核となる色である「紫」について「若紫」で源氏が詠んだ句を引用され説明されました。千年前、色は「染めるもの」で繊維を染めるものが染料です。その最高峰ともいえる染料が紫草でした。「手に摘みていつしかも見む紫の根にかよひける野辺の若草」、ここに詠まれている「紫」は藤壺を指すことや、藤壺の姪にあたる紫の上は、根が一緒であることから、源氏がせめて藤壺の代わりに手元に置きたいという思いが覗くことなどを説明されました。次に「初音」の巻名にもなっている明石の御方が明石の姫君に送った句「年月を松にひかれて経る人に今日鶯の初音聞かせよ」を挙げて、徳川美術館所蔵の「初音の調度」を紹介されました。「初音の調度」は徳川三代将軍家光の長女である千代姫が、寛永一六年、尾張徳川家二代光友に嫁ぐ折に制作された婚礼調度です。この調度を飾



講師：彬子女王殿下（芸術資源研究センター客員教授）
日時：2021年12月13日（月）
会場：芸術資源研究センター カフェスペース

る装飾は「初音」帖を題材にし、金銀を贅沢に使い高度な蒔絵技術で制作された我が国の漆芸史上最高傑作として名高いものです。彬子女王殿下は初音蒔絵硯箱を取り上げ「初音」がどのように装飾に取り入れられているか解説されました。「松」と「鶯」そして「年月」が蒔絵により施されており、源氏物語を知る人はすぐに「初音」がテーマになっていることが理解できるものです。学生たちにとっては、中学や高校の古文の授業で「源氏物語」に触れる機会があったと思いますが、今回の彬子女王殿下の講義のような視点で「源氏物語」を読み解く機会を得られた事は非常に良い機会となりました。「源氏物語」に限らず、文字、文章による表現について考えるきっかけになればと思います。

また、ご自身が参加される「歌会始」のお話もお聞かせいただきました。勅題やご経験された苦労話などと共に、ご自身が「歌会始」で披露された「和歌」や、ご自身が一番気に入っている和歌として北原白秋の「君かへす朝の鋪石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ」という歌も紹介されました。

最後に和歌と絵画の合作についても教えていただきました。36人の優れた詠み人「歌仙」の和歌とその姿が描かれた鎌倉時代の名品「佐竹本三十六歌仙絵」です。大正時代に36の歌仙絵が分割されたことに注目されがちですが、歌仙の気持ちを非常によく描写された秀逸な歌仙絵です。

「かぞふれば我が身につもる年月を送り迎ふと何いそぐらむ」と歌仙である平兼盛の表情の描写を紹介され、歌と絵画が一つになった歌仙絵の最高傑作を紹介されて講義は終了しました。時間は1時間余りでしたが、非常に濃い内容の講義でした。本学では日本伝統文化の側面からの講義の数が少なく、学生にとっては非常に有意義な時間になったと思います。講義も良かったのですが、講義後にも、工芸作品のあり方として、黒楽茶碗のお話など、個人的価値観の作品への反映のされ方や、また、誰か特定の人の為に作られてきたということなどもお話していただき、通じて非常に充実した時間となりました。

（森野彰人）

美術関連資料のアーカイブ構築と活用

「井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究」は、2017年以降、山下晃平をプロジェクトリーダーとして写真資料の分類と整理を継続してきた。写真資料の確認作業を進め、井上隆雄本人の分類を基準とする資料目録の作成は2020年度に完了した。同時に、インド・ラダックの仏教壁画および関連する撮影画像に焦点を絞り、ポジフィルムデジタル化とデータベース化を進めてきた。

共同研究者として2018年9月から関わった筆者はこの写真を見て、日本画表現の一つである模写の資料となり得ると感じ、胸躍するような気持ちを抱いた。被写体を記録した写真というのは、視覚芸術の一つの形である。井上隆雄が壁画を捉えて、記録し、伝えようとした眼差しそのものと考え。その写真を美術表現的に解釈し、様々な調査の知見と合わせて芸術実践することは、新しい視覚芸術を生み出すことと考える。芸術資源を実践に展開することはアーカイブとして意義深い。

また、この写真資料は美術表現研究に限らず、仏教図像学や文化史的観点においても研究対象になりうる。原資料の保管と並行してのデジタル化は、画像の保全と多くの人の目に触れる機会につながり、利活用の可能性がみえてくる。

これまでの研究活動を総括して「井上隆雄「インド・ラダック仏教壁画」資料展 一蘇る天空の密教図像―」（2021/3/23～3/28 京都市立芸術大学小ギャラリー）を開催した。前年度の取り組みであるが、本年度の研究活動につながるものであったので紹介する。この資料展は、井上隆雄の写真資料のアーカイブ実践自体を紹介するという趣旨で、原則として網羅的、総覧的に資料を併置した。資料に関する説明（キャプション）は、資料の規模が分かるように数量を表示した。そして、利活用の一例として井上隆雄写真から制作した

模写作品を展示した。この資料群とアーカイブ実践そのものを提示することで、来場し、写真資料に対峙した鑑賞者は個々に感じるものがあつたと推察する。来場者の中で、我々と共感する研究者たちとの出会いは本研究を次の段階へと進めるきっかけになった。

2021年度からは、筆者がプロジェクトリーダーとなり、ラダックの撮影画像のデータベース化の継続に加え、ミャンマーのパガン遺跡壁画の撮影画像の分類整理を始めた。岡田真輝（本学嘱託職員）が中心となり、井上隆雄が「BAGAN」「BURMA」とラベルを貼った箱に収納された7902枚（ポジ・ネガ含む）の整理と通し番号付け、目録作成を継続中である。

さらに、京都市立芸術大学特別研究助成を受けて「井上隆雄撮影の仏教壁画のアーカイブ実践による仏教美術研究ネットワークの構築」を立ち上げ、本プロジェクトと連動して活動している。この研究会は、加須屋誠（仏教美術史/京都市立芸術大学）、菊谷竜太（インド・チベット学/京都大学白眉センター）、末森薫（文化財保存学/国立民族学博物館）、寺井淳一（歴史学・パガン研究/東京外国語大学）、檜山智美（西域美術図像学/京都大学白眉センター）、丸川雄三（連想情報学・コンピュータサイエンス/国立民族学博物館）、山下晃平（近代美術史・アーカイブ研究/京都市立芸術大学）を主メンバーとし、其々の立場から写真資料に対しての講演、井上隆雄写真資料のアーカイブを考察する意見交換を積極的に行っている。これまでの研究会の内容は以下の通り。

4月24日 第1回「井上隆雄写真資料アーカイブ実践について」（正垣雅子/山下晃平）

7月14日 国立民族学博物館写真資料収蔵庫見学、DiPLAS採択者説明会



「井上隆雄「インド・ラダック仏教壁画」資料展」会場

8月24日 第2回「既知の素材からどのように未知なる対象を比定しうるかーアルチ三層堂「成就者肖像集」をめぐる現状と課題―」（菊谷竜太）

9月29日 第3回「パガン遺跡概要 井上隆雄写真資料の整理および利活用に向けた遺跡紹介」（寺井淳一）

10月27日 第4回「“うつす”ということ 壁画の場合」（正垣雅子）

11月24日 第5回「美術研究資料のデジタルアーカイブの活用と発信」（丸川雄三）、「地域研究写真のデジタル化・データベース化と研究への活用 DiPLASプロジェクトの経験」（石山俊/国立民族学博物館）

また、6月には、国立民族学博物館による科学研究費助成事業「新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム 地域研究画像デジタルライブラリDiPLAS 地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」に、井上隆雄写真のラダックとパガンの仏教壁画写真を壁画研究のリソースとして申請、採択を受けた。これによって、ラダックの仏教壁画のデジタル化画像1744枚、パガンの仏教壁画のフィルム2826枚のデジタル化とデジタルデータベースと画像検索システム構築の

支援を受けることになった。井上隆雄写真アーカイブの公開の範囲については検討を要するが、多くの人が見やすい形となるデジタルアーカイブの構築は大きな進展であると考える。

井上隆雄写真資料が多くの人を惹きつけたのは、井上隆雄が撮影する時の眼差しへの共感であり、細かく記述された取材ノートから滲み出る撮影の情熱への敬服であろう。この写真資料がどこかの倉庫で眠ってしまうのではなく、動的な芸術資源としての可能性を感じている。

（正垣雅子）

「森村泰昌アーカイブ」では、公開中のデータベースの活用につとめ、美術館学芸員など研究者へ情報を提供するとともに、データベースに収録されている1980年代以前の情報についても探索を続け、現在構築中の京都市立芸術大学総合基礎実技アーカイブ収録予定のデータを調査し、本学入学当初の森村泰昌関連の画像や文書資料について閲覧した。初年度教育の重要性をふまえ、実験的に構想され、開始された総合基礎実技（1971年当時「共通ガイダンス」）の姿と、森村のその後の目覚ましい活躍の広がりごとがオーバーラップする。（加須屋明子）

京都美術の歴史学—京都芸大の1950年代

本研究では、戦後の占領期・復興期の京都における本学彫刻専攻及びデザイン専攻の教育について、菊川と牧田が調査を行っている。新型コロナウイルスの感染拡大にともない、今年度も各自が近郊で行える実地調査が中心となった。対策を講じ菊川と牧田の協同で聞き取り調査を検討していたが、コロナ禍終息の見込みが立たずやむなく延期とした。

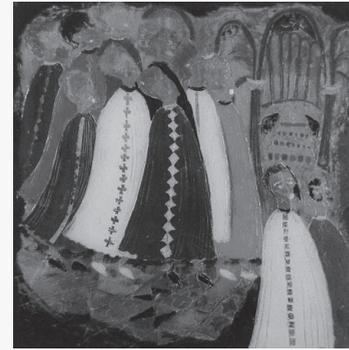
菊川は昨年度に引き続き、本学彫刻科教員の堀内正和と辻晉堂を戦後いち早く紹介した、神奈川県立近代美術館の草創期（1951-1961）における展覧会活動の背景について、関係資料から調査を行った。この成果の一部は『開館70周年記念 空間の中のフォルム—アルベルト・ジャコメッティから桑山忠明まで』展報告書に掲載した拙論で発表した（神奈川県立近代美術館、2021年、69-72頁）。近代美術館は当時の副館長・土方定一の先導のもと、展覧会を通して官展を中心とする戦前の美術史を訂正し、埋没した作家に光を当てることを指針とし、1951年の開館記念展には堀内の師・藤川勇造の個展を開催した。藤川はロダンに学び帰国後は二科彫刻部を設立したが、1935年の帝展改組の渦中で急逝。同館は1963年に堀内の個展を開催し、藤川を介したロダンの系譜が日本に根付きやがて抽象表現を育てていくという文脈が形作られた。なお兄弟子の菊池一雄は、堀内に先んじ本学彫刻科で1947年から7年間教鞭を執り、その後東京藝術大学へ赴任した。敗戦を経て美術界と作品の評価軸が再編されるなか、中央と地方の位置づけも変化していく。このとき京都という都市が担った役割について、次年度はこれまでの調査をもとに整理していく。

牧田は今年度も上野リチの教育者としての活動について研究を進めた。昨年と同様にコロナで海外渡航困難のため、ウィーンでの実地調査は来年度以降に回さざるを得なかった

が、これまで『COMPOST VOL.1』の研究ノートその他にまとめた戦前の国内での彼女の活動の報告は、他のリチ研究の主要参考文献とされるなど一定の成果が得られた。本年度は、特に本校でしか調査できないリチの戦後の教育に関して重点的に研究を進めた。『百年史』など本校の各種記念号や『美』など各種研究会誌、あるいは彼女に学んだ柳原良平や木村英輝その他卒業生の著作からリチの足跡を探り、彼女の本校でのデザイン教育の理念や授業方針を確認、その影響を詳しく調査した。またリチのウィーン工房流の教育の立ち位置を同時代の状況を把握することで具体的に検証した。今回は特に、ビジュアルデザイン研究室で保管されていたガラス工芸習作の中にリチ在職中のものが見つかり、その詳細な調査を試みる事ができた。

この資料の一つ目のグループ19作品は、調査により1965年卒業の工芸科デザイン専攻の2回生の時の課題制作と特定できた。日生劇場「アクトレス」壁画を手伝った細見保彦の作品も確認することができ、リチとの関係が濃いものとわかった。二つ目のグループ25作品は、1980年工芸科デザイン専攻卒業生の2回生の時の課題作品とわかり、1963年のリチ退官後も彼女の教育方針が確かに受け継がれていることがよくわかる資料であった。これらを中心に、リチの教育理念を直に受け止めた卒業生諸氏からその存在を具体的に語っていただき、今も受け継いでおられる現職教授へと教育が繋がっていった経緯を明らかにする機会を実現したい。これらを組み入れて来年度には教育者としての上野リチを論文としてまとめる予定である。

以上二つの研究テーマに基づき、今年度末には本学卒業生やこれまで聞き取りを実施した関係者を招聘し、研究会の実施を検討している。（菊川亜騎）



ビジュアルデザイン科に残されていたリチ教室の学生作品



調査状況

崇仁小学校をわすれないためにセンター

【2021年3月】柳原銀行記念資料館2020年度企画展「夢の新幹線、苦闘の住宅建設運動～自主映画「東九条」の世界3～」の展示に協力。崇仁地区には、京都芸大建設のため更地が広がる。その真ん中に立つ柳原銀行に、かつて人が多く賑わっていた1950年代後半（昭和30年代初期）の写真を展示する企画である。

崇仁小をわすれないためにセンターとしては、崇仁及び東九条地区の家や街並みを撮影した写真アルバムのデジタルスキャンに協力した。写真は大きく引き伸ばして展示され、小さなプリントでは確認しづらかった当時の風景を、詳細に見ることができた。崇仁地区にかつて劇場があったことも、これらの写真から確認できる。

同じく3月。美術家の伊達伸明さんに依頼していたウクレレ《崇仁小学校 京都市下京区》がついに完成した。2010年に閉校した崇仁小から2020年5月に部材を切り出し、約10ヶ月。完成を受け、地元でのお披露目を検討。「るてん商店街」（崇仁地区）で行われる地元参加型イベント（5月12日）で初お披露目することとし、検討を進めた。

【5月】12日のイベントが、開催者判断で急遽中止となる。コロナ禍による京都府の緊急事態措置（4月25日～）が、5月末まで延長されると決まったためだ。お披露目は先延ばしになり、振り出しに戻った。

【10月】崇仁自治連合会の対面での会合が数ヶ月ぶりに開催されることとなり、その場について「崇仁小学校ウクレレ」を地元の方々にお披露目した（2021年10月11日、下京いきいき市民活動センターにて）。どなたにでも来ていただける形での開催は叶わなかったが、ようやく、直接手に取り弦を鳴らしながら、ウクレレを見ていただくことができた。

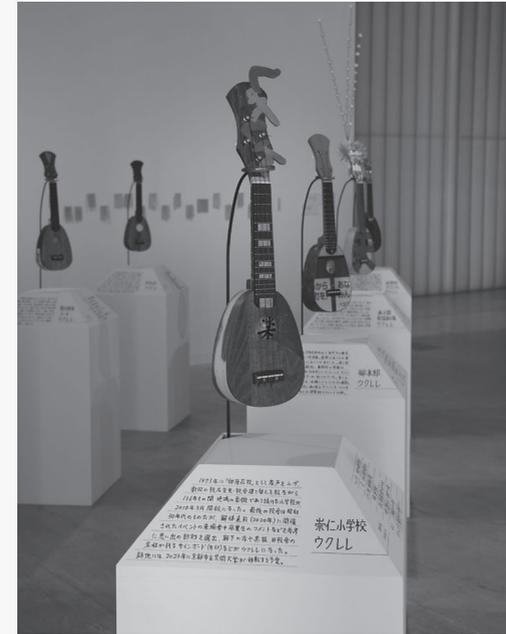
音楽室の鴨居。職員室の表札。黒板や案内板など、いろいろな学校のカケラ（現物）からこのウクレレは作られている。手に持ち、しげしげと眺めていると、たしかに在りし日の校舎の姿が蘇る。伊達さんに依頼して本当によかったと、改めて思う。

【1月】せんだいメディアテーク開館20周年記念展「ナラティブの修復」に行く。伊達伸明さんが《建築物ウクレレ化保存計画2000-2021》を出品、崇仁小学校のウクレレも最新作として展示されているためだ。崇仁小のウクレレは、会場に入って正面の一等地に置かれていた（写真を参照）。同じ形・同じ寸法だけれど、一つ一つが全く異なる「現物」が並ぶ姿は壮観である。

壁面には、建築物は人間の生活のありようを写す「転写体」である、との伊達さんの言葉がある。そこで思い出すのが、年末に崇仁で見た、倉智敬子・高橋悟の《EREHWON》という作品だ。コンテナの中に真っ暗な無響室を作り、そこに入ることによって、鑑賞者への環境からの視覚的・聴覚的刺激をほぼゼロにするもので、河原町のトンネル上に置かれていた。

無響の暗黒空間に入ると、自分以外のものがなくなってしまい、気が触れてしまうような気持ちになる。逆に考えると、日常空間においては、わたしたちを取り巻く家や建築物や自然や環境が、わたしたちを取り囲むことで、わたしたちを何者かとして生きながらえさせている、ということか。私の活動や記憶は、空間や環境という転写体を持つことでこそ存在する。転写体との関係の中で、わたしたちが作られる。だとすればウクレレは、非常に優れた転写体を新たに作ることに挑戦している作品だといえよう。

「ナラティブの修復」展では、小森はるか+



伊達伸明《建築物ウクレレ化保存計画2000-2021》(2021)
せんだいメディアテーク（撮影・佐藤知久）

瀬尾夏美の《11歳だったわたしは》も興味深かった。10代から90代の男女60数名に「自分が11歳だった頃のこと」を聞き、その内容を文字や映像にまとめた作品だが、個別の語りを何らかの物語に強引にまとめず、けれども、それぞれの間にゆるやかな連続性や共通性を見出せる作品である。語り手ひとりひとりに応じて作られた展示台。そのあいだを鑑賞者が静かに歩くことを促される動線。テキストと映像をリンクさせながら鑑賞できる構成など、ただ記録を並置するのではない工夫に満ちている。個々人の記憶をリスペクトを持って扱い、個別の記憶にいていねいに触れる、きわめて繊細な「アーカイブ装置」を見る気がした。これほど異なる年代の人たちの顔を、同時にいていねいに見たことは私にはないし、11歳の子供の視点から過去100年という長い時代をふりかえったこともない。抽象性と具体性、此性と普遍性が、鑑賞者自身の

聞き・読む行為によってつながっていく。記憶をめぐるアーカイブ的な資料をどのように整理し、どのように展示空間にひらいて活用するかという点だけをとり、学ぶことの多いすぐれた作品だった。

翌日、震災遺構 仙台市立荒浜小学校（仙台市若林区）を見学。2011年の津波で大きな被害を受けた荒浜地区にあり、被災時には児童や住民たちの避難場所になった学校である。学校の周囲はきれいに土地整備され、そのときには多数のお墓が並んでいた。屋上に登ると海はすぐ近く。かさ上げされた道の向こうには、仙台市中心部の街並みが見える。整備された風景と、ポツンと残された遺構もまた、わたしたちの活動を映す転写体である。荒浜小学校は崇仁小学校と同じ1873年に開校し、2016年に閉校している。

（佐藤知久）

タイムベースメディア作品アーカイブにおける 鑑賞性の保存・修復・再創造

第17回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展日本館展示への参加

ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展は、美術展と同様に、国が出展単位となる各国パビリオンと、旧造船所アルセナーレで開催される企画展からなる。日本は日本パビリオンを構え、国際建築展においては日本館展示として、指名コンペ形式で行われるキュレーター選出による展示を開催している。筆者は、2019年に行われた指名コンペで選出された建築家・建築構法研究者で明治大学准教授の門脇耕三氏の企画に、コンペ段階でのアイデア出しから参加建築家としてメンバー入りした。他のコアメンバーは、出展者として、長坂常、岩瀬諒子、木内俊克、元木大輔、グラフィックデザイナーとして長嶋りかこが名を連ねる。

通常、国際建築展日本館展示は、コンペでのキュレーター決定から1年に満たない急ピッチで準備から展示制作まで行われる。われわれチームも2019年7月の決定から2020年5月の開催に向けて動き出し、新型コロナの暗雲が立ち込める中、4月の段階ではあとは現地施工を待つのみとなっていた。

延期決定後は、果たしてどれくらいの延期になるのか、本当に開催されるのか、全く先行きの見えない中、webサイトの充実や、遠隔での搬入・施工の道筋を模索した。1年延期の2021年5月からの開催が決定されたあとも、実際に開催されるのかわからないまま進まざるを得なかったものの、なんとかさまざまな協力者の活躍のもと、日本からは誰も現地に行くことなく、全て遠隔での展示制作も完了し、5月22日の開幕を迎えることとなった。

新宿から小田急線の小田原方面に3駅の経堂にある住宅。日本のありふれた住宅を解体し、ヴェネツィアまで移動し、バラバラに

なった部材を展示しつつ、部分的に組み立てる。キュレーターの門脇耕三をはじめとしたわれわれ建築家チームが目じたのは、ただのありふれた建築物ひとつでも、丁寧に紐解くことによって見えてくる歴史的な資料性である。1954年に平屋として建てられたその住宅「高見澤邸」は、80年代の初頭まで増築と増棟を繰り返してきた。家主である高見澤さん一家の成長とともにその姿を変えてきた住宅は、時代ごとに産業が生み出した建材が継ぎ接ぎされ、もともとの木造住宅にアルミサッシやトタン波板など時代ごとの工業製品が張り付くさまを、ごく自然にうけいれてきた。それらを丁寧に一つ一つ検証することで、ただの住宅だったものが、戦後日本の産業史を語るためのアーカイブとなる。そして、今現在に生きる建築家の存在を、その継ぎ接ぎの先に見たとき、建築を建てる行為は、社会や産業のアーカイブを作ることにはほかならない。そして、建築家は、建材など物質を取り扱いながら過去の積み重ねの連続の上で、それ自体が次なる行為の契機を生み出すような、建築や都市のスケールで現在進行形の資料体を作っている存在であるということが、われわれチームの主張である。

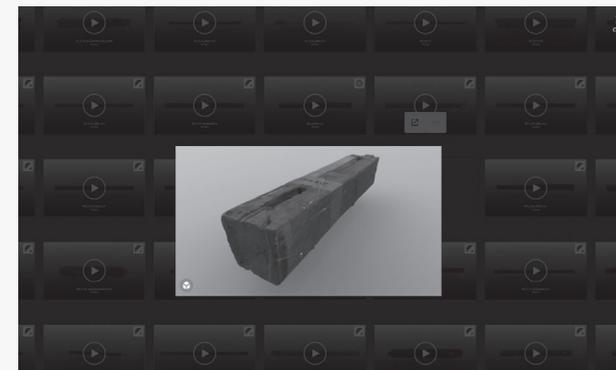
展示会は、このようなコンセプトのもと、「高見澤邸」を解体した部材、各部材の来歴や産業史的な側面を事細かく解説した動画、家主である高見澤さんのインタビュー、高見澤さん一家の変遷を示す家族写真など、アーカイブを日本館内部に展示し、日本館の外にある庭に、参加建築家たちによって少し改編されつつ再現された「高見澤邸」の部分インスタレーションが制作された。また、高見澤邸の情動的なアーカイブとして、各部材を一本一本3Dスキャンし、デジタルデータをネット上に閲覧可能な状態で提示した。(砂山太一)



砂山太一・木内俊克による「高見澤邸」の部分的な再構築



砂山太一・木内俊克による「高見澤邸」の部分的な再構築



ネット上に公開されている「高見澤邸」の部材3Dデータ ©sunayama studio

原版と銅版画作品のアーカイブ

本年度は美術家・今村源氏との作品制作を主に研究しました。氏は机や冷蔵庫、椅子や扇風機といった日用品などを使用しつつ、既存の価値観をゆさぶるような浮遊感溢れる彫刻を制作することで知られています。近年は「連菌術」というタイトルで目に見えない世界をユーモアを交えて可視化するようなインスタレーションを展開するなど、不可視の世界にこそ自然界を動かすような重要な法則が潜んでいることを指し示す、大きなスケールの制作を展開しています。本研究では、氏が日頃から関心を抱く「連菌術」というテーマの元になったキノコの存在を主軸として、銅版画を制作することに決定しました。制作を始めた当初から、地上と地下に共生関係を築く不思議なキノコの特性、地下に菌糸を張り巡らし、ときおり地上に姿を現すキノコの共生関係を銅版画制作に活かすことが話し合われました。キノコ研究者であり美術家の堀博美氏を招きレクチャーを開催し、キノコについての知識だけではなく、それらを作品として活かしていくための方法や制作過程を拝聴しました。また菌類研究会の活動にも参加し、学生たちと実際に山に入りたくさんのキノコを観察して専門家の講義を拝聴しました。その結果、本学の学生に参加してもらって銅版画作品を制作するだけでなく、モチーフとなるキノコにまつわる様々な情報も含めて作品化したいとの方向性が決まり、主に2回生銅版画基礎の授業で学生と作品制作を行いました。参加者たち各々に思う場所でキノコを採取してもらい、その採取場所や観察した内容や状況などを記録し、銅版画にて制作してもらいました。技法的にはドライポイント・エッチング・アクアチントを元に30点以上の作品が集まりましたが、それらの銅版画作品をキノコの傘の形を模したような丸い版画用紙に刷り、様々な情報と共に銅版画部分が完

成しました。今後、集まった銅版画を元に、キノコ型展示台を作成し、そのキノコにまつわる情報や記録を地図として描き起こす作業とともに完成する予定になっています。以下、今村源氏の文章を記載します。

「キノコを見つけるにはキノコ目というのが必要である。普段の歩く視線をぐっと下げて地面を注視し、時にはしゃがみこんで低い視点から探す。そんなキノコ目を備えること意外に身近なところにもキノコは出没していることに気づく。山や森だけでなく街中にもひっそりと息づいている。こんなキノコとの出会いの驚きや喜びを、銅版画という多彩で繊細な表現方法を用いて表現してみる。そのユーモラスな形態や細かい構造を表すには銅版画の緻密な線や細やかさがよく合う。写真やスケッチ、メモも加えてひとときの出会いを留めていく。キノコは一晩で成長、一日で消えてしまうこともあり、その出会いは限られたタイミングになる。季節や場所も重要で毎年必ず出会えるようなこともあるが、ある時忽然と家のプランターに顔を表すこともあり神出鬼没なところもまた面白い。その一瞬の出会いを残したい衝動にかられる。図鑑やネット情報でどんなキノコかを同定してみるのもまた面白い。だが、まだまだ解明されていないキノコも多く、その生態も含めて興味は尽きない。

こんなキノコとの体験記録を銅版画の技法を伴って集めてみる。その形態や周辺状況、その色や匂い、季節や場所などの情報を添えたものが、多くの人の参加によって時には図鑑のような集まりとして、場所の地図のような集まりとして違った魅力を放ってくることを期待したい。——今村源

(大西伸明)



学生が制作した銅版画

絵具に問う

美術研究科保存修復専攻では絵画の調査が日常的に行われており、画面の細部に関する画像や自然科学的な手法によるデータを多く得ている。これらのデータは絵画の保存や研究をする上で価値のある資料と考えられるが、これらを専攻でアーカイブする体制が整っていない状況があった。そこで、絵画からより多くを学ぶ環境を整えることを目的とし、保存修復専攻の研究活動によって得られた絵具に関するデータのアーカイブを目指して2019年度より活動してきた。2019年度および2020年度の授業である修復実習における修理作品を対象として行われる調査について、専攻として調査の実施を把握し、データを収集する仕組みの構築を行った。また、専攻を修了した紀芝蓮客員研究員が2019年度までに実施した調査で得たデータをアーカイブするための作業も進めてきた。紀研究員の調査は、近代日本画に使用された絵具の化学組成を明らかにすることを目的として実施され、芸術資料館に収蔵されている明治30年代から40年代にかけての京都市美術工芸学校および京都市立美術工芸学校の絵画科卒業作品を主要な対象としたものである。近代日本画では、近代になって新たに使用されるようになった絵具があることが知られているが、これまで調査事例が少なく、その詳細は十分に明らかになっていない。アーカイブされるデータは、絵具の種類や使用方法といった点からの近代日本画の分析への活用が期待される。データの種類は、画面の拡大写真、赤外線写真、紫外線照射写真、顕微鏡写真、蛍光X線スペクトルである。蛍光X線スペクトルとは、蛍光X線分光分析によって得られるデータで、分析対象の含有元素の情報が得られるため、絵具の同定に利用できるデータである。

2021年度は、前年度までに引き続き18点の卒業作品の調査データについてアーカイブを進めた。また、これに加え、2020年度から2021年度にかけて有志の学生によって実施された芸術資料館に収蔵されている中国絵画8点の調査データをアーカイブした。この調査は、2020年度の芸術資料館収蔵品展第4期「南宗憧憬—京都芸大の中国絵画 田能村直入寄贈品を中心に—」を機として行われたもので、調査の目的は白色顔料の同定である。中国絵画の材料研究については、白色顔料の変遷が十分に明らかにできておらず、それを解明していくための一歩として調査が実施された。調査では、卒業作品群の調査と同様に各種写真、蛍光X線スペクトルを得たのに加え、修復分野で作品の保存状態を記録する目的で作成される様式に準じた調書も作成し、作品の表具および画絹について、仕様、寸法、保存状態を記録した。調査結果の概要については、本紀要の「京都市立芸術大学芸術資料館所蔵の中国明代絵画に使用された白色顔料—画材の変遷の解明に向けたアーカイブ」にアーカイブしたデータの一部を示してまとめた。本年度のアーカイブにあたり、写真の撮影条件および撮影箇所、蛍光X線分光分析の測定条件および測定箇所の記録とデータに齟齬がないか確認する作業を川下理恵氏の協力で行った。2021年度末までに調査データの精査を終えた作品の一覧を次頁に示した。これまでの3年間の活動を通し、専攻で調査データを収集してアーカイブする体制が整いつつある。今後はより効率的な運用となるように改善を図りながら、専攻内外におけるデータの共有の仕組みについても検討を進めたい。

(高林弘実)

作者	作品名	制作年	備考
奥村耕山	婦人衣装図案	明治27年	図案科*
山崎小仙	卓被図案	明治27年	図案科
河合聚斎	楠正成応徴図	明治28年	市美**
松村金嶺	文覚頼朝に鬚髯を示す図	明治28年	市美
高山文鶏	秋景山水図	明治29年	市美
馳河藍石	漢の三傑図	明治29年	市美
長岡九二八	鎌足捧履図	明治29年	市美
星賀寿仙	隻履達磨図	明治29年	市美
加藤彩溪	江村烟雨図	明治30年	市美
兼崎得山	荒原寒風図	明治30年	市美
中西芦汀	遊糸図	明治30年	市美
本多万翠	寒塘晚景図	明治30年	市美
廣井十七吉	春風図	明治30年	市美
渡辺虚舟	釈迦成道図	明治30年	市美
奥村芳外	婦去来図	明治31年	市美
合田一峰	斎后破環	明治31年	市美
花井抱葵	秋晚	明治31年	市美
長屋秋香	寂寥	明治31年	市美
吉村青霞	落照	明治31年	市美
田中春梨	子持観音	明治32年	美工***
藤木華象	秋登	明治32年	美工
野村芥堂	郭子儀	明治32年	美工
上原楓岳	鐘声	明治36年	美工
杉本雲嶺	月	明治36年	美工
松田稔	和氣清磨	明治36年	美工
水島笠村	春暖	明治36年	美工
山田友山	曹娥(娥)	明治36年	美工
貝田黄穂	田婦	明治37年	美工
内田華岳	春風	明治37年	美工
菅沼翠外	曉風残月	明治37年	美工
鈴木華陽	黄昏	明治37年	美工
立脇泰山	黄昏	明治37年	美工
水島勘介	李斯	明治37年	美工
西堀刀水	秋の夜	明治37年	美工
丹羽琢堂	春暖	明治37年	美工
平野間雲	寂光院	明治37年	美工
本多貞翠	寒江	明治37年	美工
吉田秀嵯	幽趣	明治37年	美工
榊原雨村	野猪	明治37年	美工
有井祥雲	雨後溪澗	明治38年	美工
入江波光	春雨	明治38年	美工
岡本蕉雨	鶉	明治38年	美工
佐野五風	春宵	明治38年	美工
柴原魏象	軍鶏	明治38年	美工
高倉観塵	夕陽	明治38年	美工
谷口幽香	月夜	明治38年	美工
坪内素輔	寒林	明治38年	美工
不動立山	牛	明治38年	美工
牧互秀	鶯鶯	明治38年	美工
三戸万象	奔馬	明治38年	美工
江内春潮	鶯	明治39年	美工

調査データの精査を終えた作品一覧(2021年度末)

作者	作品名	制作年	備考
酒井耕月	鹿	明治39年	美工
里村心城	雉	明治39年	美工
角田水哉	熊	明治39年	美工
竹内鳴鳳	犬	明治39年	美工
平井操仙	角鷹	明治39年	美工
星野空外	狸	明治39年	美工
牧皎堂	鶯	明治39年	美工
松宮芳年	狸	明治39年	美工
渡辺与平	狐	明治39年	美工
山ノ内臥雲	長尾鶏	明治39年	美工
貝田黄穂	春暖	明治39年	美工
内田華岳	奔瀟	明治39年	美工
平野間雲	薄暮	明治39年	美工
榊原雨村	虎家の春夕	明治39年	美工
入江頼米	狐	明治40年	美工
岡本景涯	春溪	明治40年	美工
芝池藤一郎	孔雀	明治40年	美工
井上香峰	鶉	明治40年	美工
松浦舞雪	兔	明治40年	美工
榊原紫峰	軍鶏	明治40年	美工
二宮一鳩	雀	明治40年	美工
村上華岳	熊	明治40年	美工
西堀刀水	西行	明治40年	美工
岡本蕉雨	涼味	明治40年	美工
佐野五風	断崖眉月	明治40年	美工
柴原魏象	暮遅し	明治40年	美工
村上華岳	二月の頃	明治44年	絵専****
土田麦僊	髪	明治44年	絵専
入江波光	北野の裏の梅	明治44年	絵専
松宮芳年	堺の相生橋	明治44年	絵専
星野空外	淀川	明治44年	絵専
榊原雨村	赤土山	明治44年	絵専
小野竹喬	南国	明治44年	絵専(代替品)
佐野一星	ゆきぞら	明治45年	絵専
鄭葵裳	鸚鵡	大正3年	絵専
前田荻邨	銃響	大正5年	美工
大橋三峽	あせびの花	大正6年	美工
伝 辺文進	花鳥図	明時代	
作者不詳	花鳥図	明時代	(雉)
作者不詳	花鳥図	明時代	(鳩)
作者不詳	花鳥図	明時代	(錦鶏)
王中立	歲寒二雅図	万曆35年	
作者不詳	漁夫図	明時代	
仇英(印)	採蓮図	明時代	
張翮	高士談道図	明時代	

*京都市美術学校乙部工芸図案科卒業作品

**京都市美術工芸学校絵画科卒業作品

***京都市立美術工芸学校絵画科卒業作品

****京都市立絵画専門学校卒業作品

美術工芸のリソースに関するアーカイブズの試行

2021年度もコロナ禍の関係もあり、大人数での集会を断念し、リモートなどを用いながら今後に向けての活動を考えることにした。

活動の一つとして、京都文化遺産の維持継承に関する基本的なアクション・プランである「京都市文化財保存活用地域計画」策定委員会に外部委員として参画し、計画策定に関わっている。ここでは京都文化遺産の維持継承にあたって①「見つける」、②「知る」、③「守る」、④「活かす」の4項目に集約して検討を進めている。

「見つける」については、「旧家等が保管する民俗資料や古文書、近代以降の産業遺産等、社会状況の変化により急速に失われる可能性があるものについては、早急な調査方法の検討を行い、所在の把握と保存の取組に繋げていく必要がある」ことから、具体的な対応策を講じることにしている。大学、博物館、企業等との情報共有と共同による調査・研究を推進することで京都の良さを活かすことができると考えており、行政や大学、博物館、企業等の関係主体が、京都文化遺産に関する情報を共有するためのネットワークを構築するとともに、最新の知見や技術を活かして、共同して京都文化遺産の調査・研究を進める仕組みをつくっていく必要がある。また、出土遺物、古文書等の整理、リスト化、公開を推進することにより広く活用されるものとする。

「守る」については、京都文化遺産の保管施設の確保に向けた検討を進めている。京都市の美術工芸品、歴史資料、埋蔵文化財、民俗資料等の保管場所には課題が多く、それを良好な状態で次世代に託することができる環境整備を行う必要がある。それと共に、民間が所有する指定文化財の買い上げや京都文化遺産の災害時の受入先（収蔵施設）の確保に向けた手法の検討を行う。

「活かす」については、行政の施策に関わり

つつ、具体的なアーカイブズの方法を試みている。「京都やきものラウンドテーブル」と題して、京都市文化財保護課と奈良文化財研究所と連携して京都をめぐる陶磁器のアーカイブ作業を行った。そこでは京都をめぐる陶磁史を紐解くためのヒアリングや研究会、展覧会及びデータの公開を企図した。京都市所蔵の京都指定文化財である「三条せと物や町界隈出土の「桃山茶陶」」の高精細データを3Dスキャナーでとり、公開することを今年度から3カ年をかけて実施するものである。3Dデータをそのまま公開するだけではなく、茶人や料理人、現代芸術家、日本の古典的な器を用いることのない人々など多様な人が注目したところにタグをつけていく。この「視線のアーカイブ」を加えて公開することにより、広く共有されることを期待するものである。今年度は京都市考古資料館において12月19、25、26日、1月8、9、15、16日にワークショップを行い多くのサンプルを得た。また、2021年12月14日から2022年1月16日までの間、京都市考古資料館において「三条せと物や町界隈出土の「桃山茶陶」」を公開する「桃山デザイン」展を開催した。本学のテーマ演習（考古楽）の成果を取り入れつつ公開の手法について実践的に検討した。加えて、1990年頃に京都の市街地から桃山陶器が大量に出土したことを契機に、出土品が美術および工芸関係者と関わっていった過程について当時を知る方々へのインタビューを行った。

(畑中英二)



「桃山デザイン」展入り口看板



「視線のアーカイブ」ワークショップで得たサンプル



「視線のアーカイブ」ワークショップ



「桃山デザイン」展ギャラリートーク

バシエの音響彫刻プロジェクト

バシエの音響彫刻との出会いから6年…この6年間に知ったこと、経験したこと、考えたことについては、本誌の研究ノートとして投稿させていただいた。ここでは今年度9月下旬以降の主な活動について報告する。

【作曲特別演習での学び】

音響彫刻2基（渡辺フォーン・桂フォーン）は、しばらく本学学生会館ホワイエに解体された状態で置いてあった。9月、ある作曲家からバシエの音響彫刻の音を聴きたい、という申し入れがあり、良い機会なので作曲特別演習の授業の一環として、学生と一緒に桂フォーンを組み立てることにした。作曲特別演習は作曲専攻学部1・2回生のためのゼミである。音響彫刻は解体された状態では音が鳴らない。学生たち一人一人にスパナとペンチを持たせ、ワッシャーとナットで拡声盤を固定させていく。締め方が緩いと音がうまく鳴らないし、拡声盤同士がわずかにでも当たっていると、ビリビリと濁った音が発生する。振動が拡声盤に直接伝わるからだ。小1時間ほどで組立て終わり、みんなで試奏する。素手や、素材の異なるパチや弓などを使って、音色の違いを調べる。私もこれまでたくさんの奏法を編み出してきたつもりだが、1人の学生が今まで聴いたこともないような新しい音色をまた一つ発見した。ドレミを持つ楽器のために曲を作り、五線紙に音符を並べることが作曲であると固く信じてきた学生たちへの、違う角度からの一つのメッセージになることを祈っている [写真1]。

【サウンド&アート展への参加】

2021年11月6日～21日、東京のアート千代田3331において、「サウンド&アート展」が開催された（主催/クリエイティブ・アート実行委員会、共催/東京都教育委員会、企

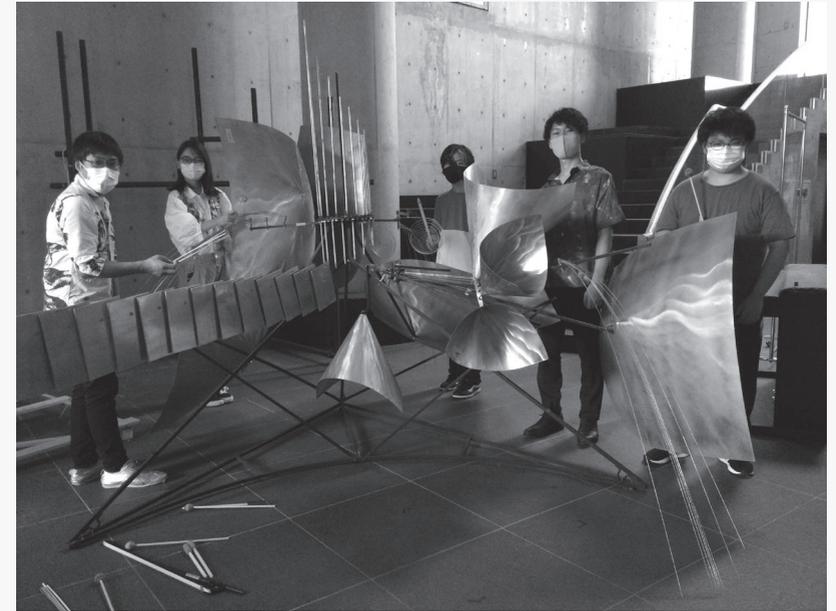
画制作/ミュージズ・カンパニー）。この展示会は「見る音楽、聴く形」をテーマに、新しい創造的な楽器やサウンドをめぐる作品を集めたもので、そこにバシエの音響彫刻と教育音具パレット・ソノールも招かれたのだった。バシエの音響彫刻としては東京藝術大学で修復された勝原フォーンが出品された。12日に行われた視覚に障害のある方々対象の展示会ツアーで、私はバシエ・コーナーの音の紹介と、ツアー参加者が音響彫刻に触れて音を鳴らす際の補助をさせていただいた。視覚に障害のある方々の反応は鋭く、振動に敏感であることがよくわかった。彼らがバシエの響きをどのような形に捉えているのか、知りたいと思った。

翌13日には、本学から送り出した教育音具パレット・ソノールを用いて、まず小学生対象の音楽ワークショップを行い、その後、指導者対象のバシエ・ワークショップを行った。

また、バシエ・プロジェクトの客員研究員である川崎義博氏も、会場でバシエ音響彫刻や教育音具をセッティングしたり、トーク・イベントにも出演するなど、このサウンド&アート展に貢献した [写真2]。

【音響彫刻の解体・組立解説動画の制作】

これまで学外で音響彫刻を用いたコンサートなどを行う場合、必ず問題になるのが音響彫刻の [解体→搬出→搬入→組立] の往復に関わる、人手と技術と経費であった。特に渡辺フォーンは、土台が非常に重い上に、19本並んだ金属棒の長さは総計4m30cmにも及び、拡声盤は2m四方もある。これらを安全に動かすには、構造を理解している屈強な人間が最低6人は必要である。この [解体→…→組立] 作業に、初期の頃から直接携わってくださったのが黒川岳氏（本学非常勤講師）



【写真1】作曲家・坂田直樹氏（左端）と共に桂フォーンを組み立てた「作曲特別演習」の学生たち



【写真2】「サウンド&アート展」視覚に障害のある方々対象の見学ツアーにおいて、バシエの音響彫刻の音を体験していただく



【写真3】渡辺フォーンの解体風景を収録する

であった。黒川氏には2019年度後期、渡辺フォーンを解体・運搬する際に部材を支える道具を制作していただいている。2020年度に数回あった [解体→…→組立] の機会も、常に黒川氏ありきのもので、この先、いつも黒川氏に頼ってばかりはいられないのが現状である。そこで解説入りの [解体・組立] 動

画を作り、それを見て構造や手順をあらかじめ理解し、黒川氏がいなくても確実に安全に解体・組立作業ができるようにすることが、この解説動画制作の目的である。撮影は12月に行われ、年度末までに編集される予定である [写真3]。

（岡田加津子）

歴史的音源で検証する20世紀ピアノ黄金期の音色

20世紀前半は、現代とは違い欧米のピアノメーカーが多数トップの座を目指し競合しており、また一流演奏家も好みの個性的な音色のピアノを選んで弾いていた「ピアノ黄金時代」であったと言える。2021年度後期のレクチャーでは、約百年前の歴史的音源と1930年英国製蓄音器を使い、当時の代表的なピアノメーカー12社の音色を聴き比べて頂いた。歴史的音源は音質修正された復刻CDでも聴けるが、録音された当時の最高級オーディオでの再生音の方が情報量が多く、古い音源の演奏スタイルやピアノの音色を正確に把握するには有利である。

今回はまず有名なショパンコンクールでの使用ピアノの変遷を紹介した。第3回目の日本人初の参加者・原智恵子がフランスのプレイエルを使用するなど、最初期は多様な選択肢があった様である。次に当時の日本での輸入ピアノ事情を紹介した。数多くの欧米メーカーのピアノが販売されていた様であるが、当時の広告を見るとスタインウェイよりもベヒシュタインやブリュートナーなどの人気が高く、日本でもピアノ選択は多彩であったと思われる。

演奏曲目は下記の通り。

フランス

エラール

演奏：フランシス・ブランテ／ショパン：エチュード

演奏：アンリ・ジル＝マルシェックス／D.スカルラッティ：ソナタ

プレイエル

演奏：ロベール・カサドシュ／D.スカルラッティ：ソナタ

ガヴォー

演奏：ロベール・ロルタ／ショパン：華麗なるワルツ

アメリカ

クナーベ

演奏：レオポルト・ゴドウスキ／ショパン：軍隊ポロネーズ

ニューヨーク・スタインウェイ

演奏：セルゲイ・ラフマニノフ／ショパン：ワルツ

ポールドウィン

演奏：グラディー・ミル・ド・パハマン／ショパン：ワルツ

オーストリア

ベーゼンドルファー

演奏：モーリッツ・ローゼンタール／ショパン：マズルカ

ドイツ

イバツハ

演奏：ウィルヘルム・バックハウス／ショパン：小犬のワルツ

グロトリアン＝シュタインヴェーク

演奏：ワルター・ギーゼキング／R.シュトラウス＝ギーゼキング編：セレナーデ

ハンブルク・スタインウェイ

演奏：アレキサンダー・ブライロフスキー／リスト：愛の夢第3番

ブリュートナー

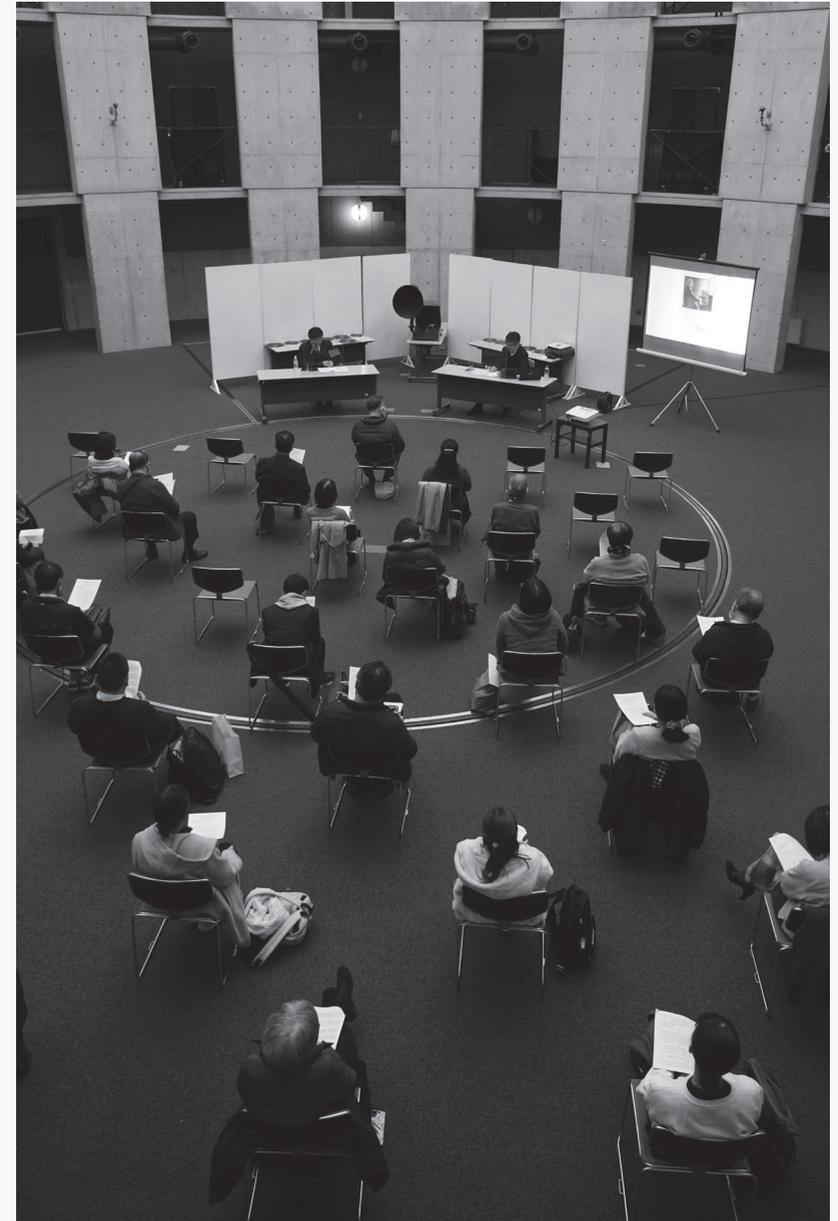
演奏：モーリッツ・ローゼンタール／ショパン：エチュード&マズルカ

ベヒシュタイン

演奏：ワルター・レーベルク／グノー＝リスト：ファウスト円舞曲

当時のトップ演奏家達はピアノメーカーの選択が自分の個性を際立たせる大きな武器であると認識していた事が、今回の聴き比べで理解して頂けたはずである。

若い世代の演奏家にとってピアノ表現の可能性を再考してもらう貴重な機会になったのであれば幸いである。 (梅岡俊彦)



京都市立芸術大学 2021年度後期レクチャー（芸術資源研究センター支援企画）
歴史的音源で検証するピアノ黄金時代の音色
「ピアノの巨匠達の音色はこんなに多彩だった！」
講師：梅岡俊彦・松原聡、2021年12月17日大学会館ホール

THEATRE E9 KYOTO 上演作品アーカイブ

本稿では、京都市南区東九条南河原町に所在する民間劇場THEATRE E9 KYOTO（以下、E9）と京都市立芸術大学芸術資源研究センター（以下、芸資研）の協働事業・研究として取り組まれている「E9アーカイブプロジェクト」について記す。



劇場外観

E9アーカイブプロジェクトは、佐藤知久教授、中井悠講師の下、2020年1月から試験的にはじまり、本格的に移働するのは、2020年度からであった。この頃よりコロナ禍による劇場の一時閉鎖を余儀なくされ、プロジェクトの実質的な稼働は同年9月からとなった。初年度の運営は、京都市立芸術大学の学部生または院生の10名ほどと共にを行った。

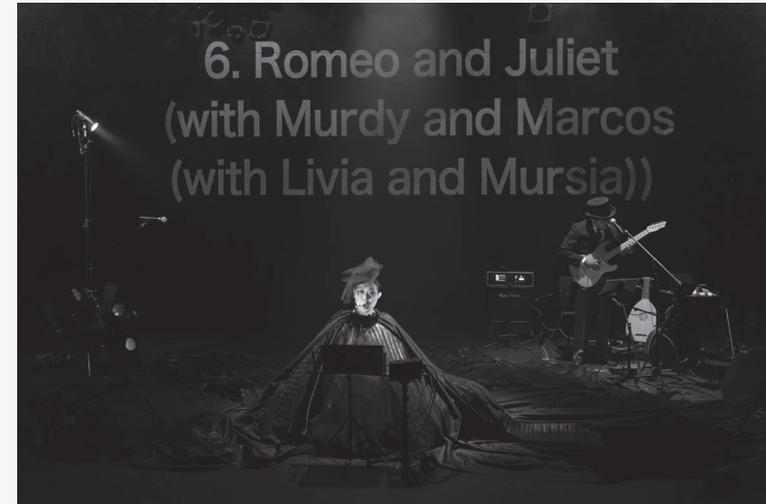
アーカイブの対象は、THEATRE E9 KYOTOで上演され、かつ、アーティストの同意を得られた諸作品。記録の内容は、デジタル化できるものに限定し、具体的には、記録動画、広報物のデータ、テクニカルライダーなどである。各種データは、目録と共にE9と芸資研に保存される。保存されたデータの活用については、研究目的で、E9及び芸資研でのクローズドな環境に於いて視聴閲覧できるとどめている。更なる活用や公開の在り方について検討が続けられている。

20年度の最後には、中井講師よりアーカイブの在り方について考察を深めるべく、

イエレナ・グラズマン氏によるレクチャーを提案頂き、オンラインにて実現した。同レクチャーは、一般にも公開された。グラズマン氏の編集する『Emergency Index: An Annual Document of Performance Practice (エマージェンシー・インデックス：パフォーマンス実践の年間記録)』が紹介された。「ラディカル・インクルージョン」という理念のもと、掲載を希望する全ての作品をペーパーブックという形で収録する。1作品あたり、1ページの作品紹介と1ページの写真という構成。同ブックは、書店やインターネットにて世界中で購入が可能となっている。アーティストに対しても市民に対しても、望めばアクセス可能な最大限開かれた仕組みを持っている。また、テキストと写真を編むという簡素な手法により、事業の持続可能性を担保している。

21年度は、東京大学に移籍された中井講師にかわり、筆者がプロジェクトリーダーとなった。運営にあたっては、新たにプロジェクトメンバーを募集する際、佐藤教授から学生だけでなく広く社会に公募してはどうかのご提案をうけた。この取り組みを一つの運動として輪を広げてみることで、無機質なアーカイブ実務をより有機的に創造的に考えてみようというものだ。結果、京都市立芸術大学の学生の他、アーティスト、研究者、映像関係者、批評家、主婦などの多様な職能や背景をもった方々が10名ほど参加頂く事になった。原則第一火曜日を定例のミーティング及び研究会と設定し、また、この定例会には、メンバー以外も参加出来るセミオープンスタイルをとった。E9での上演アーティストのほか、観客やライター、他大学の若手研究者などが訪れ、議論が活発に行われている。

上演作品の記録活動は、プロジェクト参加者が分担して行い、継続的につづいている。だが、記録した映像や預かった資料が集積さ



舞台写真（撮影：金サジ）

れる一方、映像記録の方法や、記録や資料の活用方法（「誰が」「何のために」「どのように」活用するか）など、未解決の課題は多い。記録活動を許してくださっている劇団やパフォーマーの方々の意向を尊重しつつ、記録を活用するための方法を模索しているところ

である。

最後に、2年間の活動を支えて頂いた、メンバーの諸氏、協力を頂いたアーティストと共に、村上花織氏、21年12月にE9を退職した福森美紗子氏に感謝の意を表する。

（あごうさとし）

映像配信のアーカイブ実験室

本プロジェクトはライブ配信を通じたアーカイブの利活用や共有のための新しい方法を実験することを目的としている。2020年度のコロナ禍においてこれまでの対面でのやりとりからオンライン・レクチャーやライブ配信の必要性が高まり、その試行錯誤の経験から本プロジェクトは構想された。2021年度は上半期はオンラインが続いたものの、下半期は対面の活動が回復しつつ、また新たなコロナウィルスの流行による不安定な状況が続いており、日々の対応の切り替えで十分な新たな実験が行えずにいる。

とはいえ今年も昨年と同様に、7月13日にクラブメトロで行われた古橋悌二の生誕祭「"LOVERS 61" Teiji Lovers Birthday Bash」に映像配信者として参加したことは特記しておきたい。これは、対面とオンライン配信のハイブリッドでの開催となったが、今回は大学時代から古橋悌二のことをよく知る山中透氏、シモーヌ深雪氏、ブブ・ド・ラ・マドレーヌ氏によるトークを軸に、その背後のスクリーンに1980年代のバンド活動やダムタイプ結成前の未公開のパフォーマンス映像などを投影させた。導入として山中透氏の用意した自らの新曲レイクエムのリミックスに合わせて、エイズ危機の時代に展開した美術作品の静止画のオーヴァーラップを通して、故人が創作を開始する時期の多様な美術表現とともに回顧した。今回用いた当時の記録映像は、ベータカムの映像をデジタル化したものだが、未編集のライブ記録や実験テイクが中心である。その映像は、現代の基準からすると解像度は低く、画面も黒潰れしている。今回の配信では、当時のビデオの貧しい質感を活かすために一部の映像は彩度を落としてコントラストを強調しながら光に沈む黒を強調し、それにゲイリー・ヒルやサバイバル・リサーチ・ラボのフッテージやダイヤモンド・

アー・フォーエバーの当時のフライヤーなどサイケデリックな色彩の映像もアルファ合成した（ツールとして2系統の動画ファイルの再生速度を緩やかに変化させながら合成できる「djay」を使用）。過去の記録映像、既存のアート、時代を回顧するトークや音楽をリアルタイムで相互に調整しながらひとつの場が創出された。イベントの流れにあわせた映像はディゾルブや変形によって抽象度が高められ、時空の異なる映像のリミックスは、音楽のリズムと同期される。クローズド・サーキットのフィードバック——ループや反復、時空の歪みやモアレ——によって、当時の精神を少しでも喚起できていれば幸いである。

さて、こうしたイベントに並行して沓掛キャンパスの記録を写真で残す試みも進めている。当初の予定では、白黒写真でキャンパスを記憶したり、過去にキャンパスで撮られた写真を回顧するワークショップをライブ配信と併せて行う予定にしていた。しかし対面をとまなうワークショップのライブ配信は、感染リスクを考えると日程の調整と参加者への呼びかけが難しいこと、また現在中心となるスタッフに配信の経験がなく準備に手間がかかることから断念した。代わってこれまで録画と編集を行ってきた映像配信法に切り替えた。また、ウェブからの写真投稿の利便性を高めるために投稿システムのアップロードを図ったため、下半期からの沓掛キャンパス写真アーカイブプロジェクトのYouTubeでの投稿頻度が遅れている。来年度は感染状況を見ながら遠隔参加も含めたライブ配信のあり方を一から見直したうえで、より柔軟に状況に対応できるアーカイブ利活用の方法を模索する予定である。

（石谷治寛）



ミス・グローリアス、DJ南塚也



山中透、シモーヌ深雪、ブブ・ド・ラ・マドレーヌ 京都メトロにて

京都芸大国際交流アーカイブ

2019年、大学の交換留学制度が始まる30周年を迎えたことを機に、美術学部国際交流委員会にて、交換留学のアーカイブを進める計画が立案された。国際交流委員長（当時）の金氏徹平准教授をプロジェクトリーダーとして、英国ロイヤル・カレッジ・オブ・アート（RCA）との交換留学30周年記念アーカイブプロジェクトを発足。翌2020年度には本学特別研究助成と、京都市の「京（みやこ）グローバル大学」促進事業の補助を受け、RCAへの交換留学を経験した卒業生に対する大規模な聞き取り調査と、現在も芸術分野で活躍を続けている計六名のアーティストに、ロングインタビューを行った。その研究成果は、「Mono/Things」と題したウェブサイトで発表している。同年には、「京都市立芸術大学国際化方針2020」が策定され、全学的に留学実績のデータ整備に取り組むことが正式に決定。その一連の流れを受け、現美術学部国際交流委員長・金田勝一教授をプロジェクト・リーダーとして発足したのが本研究「京都芸大国際交流アーカイブ」である。

本研究では、卒業生に対する聞き取り調査を軸に、交換留学の経験を振り返りながら、その効果を可視化し、データとして蓄積することで、個人の経験である交換留学の効果を大学全体に還元することを主な目的としている。また同様に、本学に海外から学びに来ている留学生への聞き取り調査も行い、様々な国際交流の成果を可視化する手段の研究を重ねていく。初年度となる2021年度は、オンライン形式で、音・美二名の卒業生を招き、お話を伺うイベント「交換留学から迎えるキャリアパス」の開催と、本学へRCAから派遣交換留学生として来日した経験を持ち、版画専攻の非常勤講師でもある「ジョニー・ミラー氏へのインタビュー」を行った。

交換留学から迎えるキャリアパス

本研究企画は、本学教務学生課、学生・国際担当とキャリアデザインセンターが共同で開催したユニークな取り組みである。音・美それぞれの卒業生を大学へと招き、それぞれのお話を交互に伺うことで、交換留学当時の記憶と、現在の活動との関係を解きほぐす試みを行なった。事前に参加者を募る広報活動を行い、学生が自由に聴講できることを周知した上で、細やかに参加者が質問をすることができる機会を作ることで、講演・対談・座談会をミックスさせたスタイルを進めるのが本企画の特徴である。特に、留学を希望している現役学生に対して、積極的な質問を促し、ニッチな質問の投げかけを誘発すること、そこからそれぞれの個人的な経験を通じた回答を得る機会を作ることで、留学経験者の経験をより多様な形で還元する試みを行なっていく。本年10月7日に開催した第一回では、ゲストに作曲家の山根明季子氏（作曲専攻出身。ドイツ・ブレーメン芸術大学に留学）と、美術家の久門剛史氏（彫刻専攻出身。RCAに留学）をお招きした。それぞれの視点から、海外での経験や、留学前後の学内での思い出を話していただき、その差異や共通点を共有しながら、学生の素朴な疑問や質問があった際には、必ず二人でそれぞれが答えることで、常に可能性を複数提示する多様性に富んだ内容となった。本企画は文字起こしと、記録動画を編集した上で、文章と動画の形で後日ウェブサイト上に公開予定である。

ジョニー・ミラー氏インタビュー

2020年度に行なったRCAとのアーカイブ事業では、本学から派遣された卒業生に対してしか調査が行えなかった。当初予定していた京都芸大に学びに来た留学生に対してのインタビューは、本研究にて引き続き方針であ



https://intl.kcuu.ac.jp/rca-kcuu30/mono_things

る。第一弾のインタビューとして、2021年度、本学に上講されている、美術家のジョニー・ミラー氏にお話を伺った。本インタビューについても同様に2021年度中にウェブサイト上で公開予定。

今後の方針としては、新型コロナウイルス感染症の流行状況次第ではあるが、海外で暮らす卒業生への聞き取り調査や、協定校を訪ね、留学中の学生の滞り風景を取材したり、京都芸大への留学経験のある現地の人々に聞き取り調査を進める計画である。2021年度中に、美術学部国際交流委員会では、ドイツの美術大学現地視察を予定しており、それに合わせて、ヨーロッパ各地で活動している卒業生や、元留学生への取材を予定しているが、今以って先行きは不透明である。今後の状況に合わせて、国内での調査を重点的に進めたり、オンラインでの取材活動を進めたりするなど、どのような状況でも停滞することなく研究活動

を進める手段を講じていく。

芸術大学では、アーティストや音楽家としてのステップアップの機会だと捉えられがちな交換留学だが、人生というキャリアの中で留学がどういった機会となっているのか、より大きな視点で捉える研究を進めていく。そのためには、今後は必ずしも作家活動や音楽活動を続けている修了生に限らず、様々なキャリアを重ねている卒業生を招き、交換留学の経験を、人生のキャリアにおける価値という視点からより多角的に捉え研究し、その一方で、様々なデータを蓄積していくことで、派遣先や専攻が違っていても、その根底に共通している、芸術分野での交換留学や海外経験の意義についての研究も深めていく。またその研究成果を共有する手法についても創意工夫を重ね、本学における国際交流の重要性を周知する活動にも尽力していく所存である。

（橋爪皓佐）

Stone Letter Project

本研究プロジェクトは、京都芸大の倉庫より発見された明治以降に印刷産業で使用されていた石版と、それらの石版をめぐる情報を記録し、後世に残していくアーカイブを作成することを目的としている。

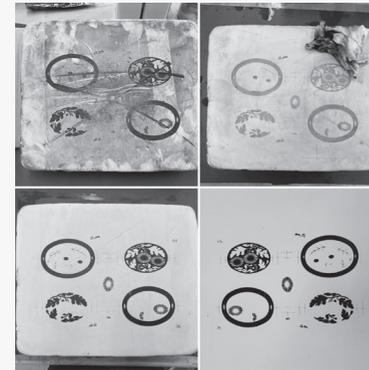
2017年に、本研究のきっかけとなる340枚の石版がアトリエ1号棟の倉庫より発見された。石版は40年前に大学が今熊野から沓掛へ移転したときに運び込まれたままの状態を保管されており、日本専売公社京都印刷工場が印刷媒体としての役割を終えて廃棄することとなった石版を、学生が制作で使用する材料として大学に譲渡されたものである。何枚かは版画専攻でリトグラフ用の材料として石の表面を研磨して使用していたが、様々な興味深い画像が製版されたままの石版について、研究協力者である「たばこ塩の博物館」学芸員・谷田有史氏に調査を依頼したところ、ほとんどがタバコのパッケージ印刷用の石版石であり、大蔵省専売局時代のものを中心に、昭和24(1949)年に日本専売公社が発足してから製造・販売されていたものも含んでいた。時代的には、「たばこ」が専売品となった明治37(1904)年7月1日以降、昭和43(1968)年4月頃まで、実際に印刷や校正用として使用されていた石版であるとの調査結果が得られた。日本専売公社が「廃棄物」として京都芸大に譲渡したとはいえ、50年近くの時間を経た現在では、いくつかの石版は資料的価値があり、本研究ではこれらの石版を教育的資料としてアーカイブし継承してゆきたいと考えている。産業としての役目を終えた石版を用いて再度印刷することは、時代と共に衰退する古典技法の継承だけでなく、表現の新しさを検証する側面を併せ持ち、石版画やパッケージデザインの理解と鑑賞を深めることができると考えている。

昨年から続く新型コロナウイルスの感染拡

大により、集まっていた作業が制限されたことで、石版を倉庫から運び出して再分別する作業が5月から8月にずれ込んだ。研究協力者である名古屋芸術大学の片山浩氏、京都精華大学の衣川泰典氏、大阪芸術大学の坂井淳二氏、また版画専攻の非常勤講師の先生や学生10名、本学芸術学専攻の畑中英二先生、芸資研の佐藤知久先生と桐月沙樹氏に猛暑の中お手伝いいただき、倉庫から1枚約10kgある石版240枚を一つ一つ運び出して、全てを虫干しのようにピロティに広げられた後、石版プレス機の設備がある新研究棟に運び入れた。石版そのもののアーカイブと同時に、2年後の移転先の新校舎の版画工房で全ての石版を保管する事が難しい事もあり、記録とともに石版の選別も今後進めていく予定である。

8月から本格的に研究作業を開始し、研究協力者の衣川氏と版画専攻の学生2名とで改版と製版と刷りの作業を分担。石版に残された画像を版画紙に刷った印刷物と、写真撮影した画像データでの記録を、現在も継続して行っている。タバコのパッケージを印刷するための石版は何版かに分版されており、一つの石版だけではパッケージの完成とはならない。産業の視点からは、分版されている石版を色版として重ねて刷る事でタバコのパッケージとしての完成を目指す。本研究では、分版を刷り重ねるパッケージ印刷の再現を目的としている訳ではない。発見された石版に残された画像の全てを印刷して記録することを目指し、同時に沓掛校舎の片隅にある倉庫の内容物を紙に刷る事で明らかにし、石版をめぐる情報や京都芸大の歴史そのものを、違う視点で記録してゆく事にもなると考えている。

実際の作業を始めるまで、50年以上前の時を越えて発見された石版に残されている画像を元の状態のように紙に印刷ができることは困難であると予想していたが、石版一つ



昭和初期のタバコのパッケージデザインが製版された石版の復刻作業工程(有機溶剤での洗浄→再製版→石版プレス機で印刷)

つに残されている画像の硬化したインクを揮発性の高い有機溶剤で洗い、製版インクに置き換えて紙に刷る作業を繰り返していくなかで、予想以上の再現度で印刷できる事が分かり、石版の記憶媒体としての強度と性能に驚かされている。本研究によって、物質的な重量を伴う版に実際に触れることで知りえる体験と情報が、確実にあることを実感している。

現在では、石版画の技法を保存、継承している工房や大学も少ないなかで、あらためて「石」に着目した本研究では、「石」という物質としての媒体を見つめ直し、描く身体と「石」との関係性、そこで生じる情動について見つめ直すことも重要だと考えている。

石版画は描画からプレス機による刷りまで、その場で確認しながら制作者がコントロールできる。版材である石との格闘、描画のための道具や材料の吟味、インク、用紙への執着など、工程は結果や予定に合わせるといふより、模索しながらの作業になる。そこには試行錯誤と偶然性や意外性がともない、感覚的作用と瞬時の判断、肉体を使った力技も求められ、それだけ版との身体的距離も近くなると考えられる。版画に至るプロセスには身体的な思考と行為が凝縮している。さら



2021年8月2日、アトリエ1号棟前のピロティに倉庫から石版をならべ選別作業を行った

に刷る行為によって石から像が引き剥がされ、身体を離れ複製された新たなイメージの物質として現れる。思考する身体と、描き、刷る身体を強烈に拘束する「石」の存在がそうさせているのではないだろうか。過去の堆積物である「石」との身体的な関わりは、プロジェクトのタイトルにもある「手紙」のようなやりとりであり、石から紙に写しとられた像は過去からの「手紙」のようでもある。

来年度に予定されているギャラリー@KCUIAでの展示では、「Stone Letter Project ——石からの手紙」と題して、石版と石版に残されている画像を紙に刷った印刷物などの研究活動の成果を展示発表する予定である。プリンターでの出力が容易になった今日、あらためて版画と印刷について再考することは、印刷に至るプロセスに内包する制作者の思考と創造性に光を当てることでもある。現在のほとんどの印刷を担う平版オフセット印刷の起源である「石版」に着目することで、現在簡単に扱うことができるようになった写真や画像などの「メディア」は「物質」であるということをも再認識する機会となるよう、本年度の活動成果を基盤としながら準備を進めている。

(田中栄子)

MIMIC

本プロジェクトでは、現在進行形で活動を続けるアーティストへのリサーチとアーカイブを通じて、これからの美術史における作者や作品、地域の語り方を探っている。

本稿では研究報告の場を借りて、2020年より継続している画家・石井海音のリサーチの改善点を整理することとしたい。そのためにも、MIMICのねらいを概要する。

MIMICには、二つ特徴がある。一つ目は、現行のアーティストが、自分たちの活動する地域に関しての記録・調査を行うリサーチプロジェクトであることだ。MIMICメンバーの岡本秀（絵画）、熊野陽平（現代美術）は、京都の美術——より細分化すると、京都市立芸術大学での美術教育——に接してきた当事者として、同じ地域にゆかりのあるアーティストへのリサーチを行なっている。

リサーチの方針は、コミュニティ・アーカイブの考え方から出発したものである。コミュニティ・アーカイブにおいては、地域に住む人々が、自ら主体的に記録を作る。ここでは、客観性のある調査事実や学術的に価値の保証された公的記録とは違って、市井の人々の主観的な語り大切にされる。

これを踏まえ、MIMICは①アーティスト自らが、身近なアーティストについての記録を残すこと、②記憶の再編成、取捨選択によって大きな物語を記述しようとする取り組みに対して、個人の抱える複雑さを、なるべく形を保ったまま記述する方法を探すことを念頭に調査を行なっている。

二つ目の特徴には、リサーチ対象となったアーティストの「模倣」による調査方法が挙げられる。模倣を調査方法とするに至ったのは、岡本、熊野が参加するマンガ冊子『おぼけの連判状』において、参加者の描いたオリジナルの物語を改変しあう方式を用いたことが発端である。『おぼけの連判状』では、ほと

んどの参加者にとって慣れないマンガ制作を扱い、参加をアーティストに限定しない。さらに、模倣や改変によって互いの作品へ介入を試みるものだが、MIMICではアーティストが用いる固有の技法やテーマを解体し、開かれた技術へと読み替える意味で模倣行為が用いられる。

石井海音のリサーチにおいては、石井の作品制作についてインタビューを行い、岡本が石井の手法を使って油画作品を制作した（アーティストの模倣によるリサーチのことを、プロジェクト名のとおりMIMICと呼んでいる）。

MIMICのリサーチ手法を用いた本格的な記録としては石井が初めてだが、石井をリサーチ対象とした理由は、調査者の岡本と同世代で共に京都市立芸術大学で絵画を学んでおり（岡本が日本画、石井は油画で専門は異なる）、おぼけや画中国画といったモチーフを扱っている点など共通の関心が見られたことが大きい。また、ここで深く踏み込むことはできないが、石井の作家性に、同世代やこれからの絵画を理解するうえでの重要な手がかりがあると筆者（岡本）が感じていたことも理由の一つだ。

紙幅の都合上、リサーチの詳しい概要は2020年に開設したMIMICウェブサイト（<https://mimic-art.net/>）と現在制作中の記録集を参照されたいが、以上のように、MIMICでは実験的な方法を通じてリサーチ・アーカイブ活動を行なってきた。一方、暗中模索の部分もあり、コンセプトや活動内容については批判や反省点があった。

最も多く批判があったのは、なぜ評価の定まらない若手アーティストを対象とするのか、という意見だ（例：もっと評価の固まった巨匠や教授クラスのアーティストを対象とすべきではないか）。確かに若手アーティストを対象にすることには問題も伴うが、先に



石井の作風の模倣制作（MIMIC）をする岡本

見たコミュニティ・アーカイブの視点と語り方への問いを踏まえれば、当事者視点で身近な対象をリサーチすることもまた不自然ではないだろう。コミュニティ・アーカイブ的な視点の持つ前提をより浸透させるとともに、MIMICの発表を増やすことで、この批判に対しては積極的に解答していきたい。

また、石井について語るために岡本の作品を鑑賞することになるなど、リサーチが内包する入れ子構造の分かりづらさをどう提示していくかも検討の余地があると思われる。加えて、ドキュメンテーションの単純なクオリティにおいても、技法調査の方法、制作過程の記録をより洗練していかなければならない。

以上のように反省点は多いものの、年度末には石井のリサーチの成果発表展を控え、第二弾、三弾のリサーチも動き出している。前向きに発表を続けて、少しずつ改善を図っていききたい。

今後は、調査者として岡本・熊野以外のアーティストも参加し、調査者の興味や活動に合わせてリサーチ対象となるアーティストを決定する方針である。

今年度開始したリサーチは、多摩美術大学で版画を学び、京都市立芸術大学大学院の

彫刻専攻に在籍中のクニモチユリによるものである。リサーチする対象は、京都精華大学で版画を学んだ迫鉄平・澤田華の2名だ。

最後の改善点に、調査対象がある。リサーチを開始した当初は、京都（または京都市立芸術大学）の美術を調査する名目だったが、活動を継続するうちに、調査対象にぶれが生じてきた。これは、今後リサーチしたいアーティストが様々な拠点で活動を行っていたり、別の地方で長く美術を学んで、現在は京都で制作をしている場合などがあることで、そのアーティストの何をもって「京都」だとするのか判断が難しくなったことに原因する。こうした理由から、対象の範囲を無理に限定することは避け、あくまでも身近なアーティストについてのリサーチとして継続する方向で活動することとした。

以上、MIMICの活動の改善点を整理し、今後の方針について報告を述べた。

これからも、MIMIC自身が「考えながら」制作する振れ幅のあるプロジェクトとして進んでいくことで、語り方を考えるという最初のテーマに対して、実践的な解答を試みていきたい。

（岡本 秀）

第34回アーカイブ研究会 失われた絵画とアーカイブ 宇佐美圭司絵画の廃棄処分への対応について

講師：加治屋健司

(東京大学大学院総合文化研究科教授、京都市立芸術大学芸術資源研究センター特別招聘研究員)

2021年6月21日収録後オンライン配信



2018年4月、東京大学本郷キャンパスの中央食堂に長年掲げられていた、宇佐美圭司(1940-2012)の絵画《きずな》(1977)が、前年に廃棄処分されていたことが判明した。寄贈された美術作品を、大学(正確には東京大学生協)自らが廃棄するというショッキングな事件について、東大は5月8日にコメントを発表。9月28日には、シンポジウム「宇佐美圭司《きずな》から出発して」が開催され、翌年5月にはその記録集も刊行された。さらに2021年には、《きずな》の再現画像と《Laser: Beam: Joint》(1968年南画廊にて初展示)の再制作作品を他の絵画作品などと合わせて展示した、「宇佐美圭司 よみがえる画家」展が開催された(東京大学駒場博物館、7月1日～8月29日まで)。

今回のアーカイブ研究会では、作品廃棄後の対応、特に2018年のシンポジウムや2021年の展示に至る調査研究において、中心的な役割を果たした加治屋健司氏をお招きし、《きずな》および《Laser: Beam: Joint》の再制作をめぐる話題を中心にお話いただいた。加治屋氏は芸資研の前専任研究員でもあり、2015年には芸資研で古橋悌二《LOVERS》の修復作業にも関わっている。

宇佐美圭司は1990年から95年にかけて本

学美術学部教授をつとめた。レクチャー後は、コメンテーターの石原友明氏(美術学部教授)のほか、京都市立芸術大学時代の宇佐美の教え子のベ・サンスン氏(アーティスト)、國府理「水中エンジン」再制作プロジェクトのメンバーでアート・メディエーターのはがみちこ氏らを交えて、ディスカッションを行った。研究会の内容全体については、動画記録(<https://www.youtube.com/watch?v=7SIPGyGH4>)を、またあわせて同展カタログに掲載された加治屋氏の論考を参照していただくことにし、ここでは筆者が重要だと感じた3つの論点を記しておきたい。

1. 作品を記録することの重要性

あらためて痛感されたのは、実に当たり前なのだが、芸術作品の記録を残すことの重要性である。大学生協の食堂に、撮影するとどうしても照明器具が映り込んでしまうかたちで配置されていたため、《きずな》には「正面から障害物なく写した写真」が一枚も現存していなかったという(廃棄が判明した時点では、作品名すら不明)。《Laser: Beam: Joint》でも、作品の構成要素の正確な配置に必要な図面は残っていない。今回の展示にあたって

は、加治屋氏やそのチームが数年間にわたる調査を国内外で行い、作家本人のアトリエから《きずな》の全体像を写したカラーポジフィルムが発見されたものの、正面から写した写真は依然として発見されていない。

2. 再制作における判断を記録することの重要性

作品そのものが現存せず作家も存命ではない場合、調査によって集められた種々の資料とその読解、ならびに、作品および作家に関する研究＝言説から得られた知見をもとに、芸術作品を再現＝再構成することになる。だが、どうしても詰めきれない細部(写真からは正確に判読できない等)については、再制作を担当する人間(研究者、学芸員、アーティスト、技術者…)が「判断」することになる。今回の場合でいえば、《きずな》再現画像における色の決定、《Laser: Beam: Joint》での、安全上の理由から当初のコンセプトに反するような変更(レーザーを1箇所からではなく3箇所から発する)を行わざるを得なかった点、などがそれにあたる。

そこで重要なのが、こうした細部に関する判断を、誰が・どのように行うかという問題である。

ディスカッションで石原友明氏が指摘したように、オリジナルの作者が存命の場合でも、作者の言説が作品にとって歴史修正主義的に働くケースがありえる。作者に近く、作品にとっての当事者性が高い特定の「強い語り手」が、再制作の現場で影響力を行使することもあるだろう。

もちろん(作家が存命であれそうでない場合であれ)work in progressとして、またある種のリミックスとして、芸術作品が時代や社会的な状況とともに変化成長することはつねにありえる。だが、作品がもつ変化の可能性は、その作品自体に、そもそも変化の可能性を包摂するような特性があったかによって大きく意味を変えるであろう。はがみちこ氏が言うように、変更には「非当事者として再制作に関わることの責任」がともなう。作品そ

のものに関する記録に加え、再制作時のプロセスを記録し作品に付随させて継承することが、作品が時間の流れを超えたアクチュアリティを持つうえで重要だと思われるのはそれゆえである(保存修復と再制作の差異を考えることにもつながるだろう)。

3. 作品論の重要性

加治屋氏によれば、今回の展示では展示作品が10点と少なく、各時期の代表的作品が並んだ結果、個々の作品が「宇佐美圭司という画家の人生」を説明する「挿画」として読まれてしまう危険性があったという。作家自身のナラティブやこれまでの言説(批評や研究)が既につむぎあげている作家像に寄り添うだけでは、作家が今ここに「よみがえる」ことにはならない。加治屋氏が何度も強調したように、「作家や作品についての多様な言説」、特に作品論を残すことが重要なのは、作品に、作家自身による／作家に関する(ナラティブ)から逸脱する要素があるからだ。作家像を越えていく作品論によって議論が展開していく。そうした作品論を増やしたい、と加治屋氏は言う。

ダムタイプ《pH》のアーカイブや、《水中エンジン》の再制作プロジェクトをふりかえっても(本誌所収のシンポジウム「過去の現在の未来2 キュレーションとコンサベーション その原理と倫理」を参照)、「必要であればその作品の再制作が可能になるような記録を残す」ことは、非常に有意義な記録方法だ。今回は東京大学の事例だが、移転を控えた京都市立芸術大学でも、同様の「廃棄」が起きる可能性は充分にある。個々の芸術作品に適した記録活動を、日常的な制作や研究のなかに、負荷をかけずに、むしろそれ自身が芸術的な営みとして面白くあるようなやりかたで組み込んでいくことに、これからの可能性を感じる。

(佐藤知久)

第35回アーカイブ研究会 吉田亮人チェキ日記展と第35回アーカイブ研究会

講師：吉田亮人（写真家）、松本久木（松本工房代表／グラフィックデザイナー）

研究展示 | 2021年8月24日（火）－8月29日（日）

研究展示会場 | 京都市立芸術大学 小ギャラリー

研究会 | 8月28日（土）14:00～（オンライン配信）

吉田亮人氏は写真家である。作品は国内外で展示・出版され、高い評価を受けている。今回のテーマである「チェキ日記」は、氏が写真家となる以前の2009年から現在に至るまで、毎日1枚「チェキ」フィルム（富士フィルム製のインスタントフィルム）で撮りつづけている、数千枚におよぶ家族の記録写真だ。

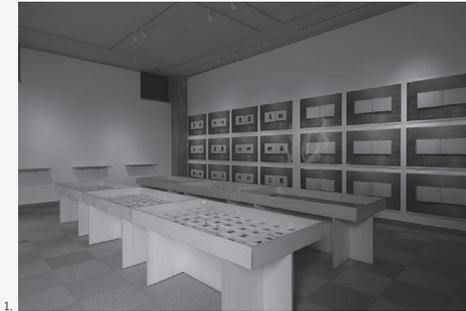
チェキ日記は、子供の誕生をきっかけに、日々変化する楽しかった思い出や、小さな子供のたたまないなどを「忘れてたくない」という強い気持ちからはじまったという。日常の感覚をなるべく生の状態で残す手段として、記憶をふりかえる契機として、写真はいいメディアですと吉田氏はいふ。特に何かを意図的に撮ろうと狙うのではなく、ピンと来たとき、「おもしろい！」と思ったときにシャッターを押すそうだ（いずれは子供たちにプレゼントする予定だという）。

撮影時には日付だけを裏面に記入し、時間があるとき、月光荘製のスケッチブックに日付と短いコメントを添えて貼る。「チェキ」を使うのは、時間が経ってからではなく、日々の流れのなかでその瞬間に感じたことを、生々しく覚えている身体のまま、ことばと写真で記録したいためだそう。1日に1枚しか撮らないので、写真家としても鍛えられる。デジカメだと写真を撮りすぎて、取捨選択してしまったり、プリントからアルバムに貼るまでに、時間がかかりすぎてしまう。チェキフィルムは、〈再編集する視線〉をできるだけ介入させず、日常性を身体的な感覚を維持したままアーカイブしつづける、そうした記録に適した自律的で簡便なメディアなのだ。

松本久木氏はグラフィックデザイナーである。吉田氏の写真集や、この『COMPOST』もデザインしている。あるとき松本氏は、偶然、チェキ日記の一枚を見る。すぐその魅力にひきつけられた、という。これは何？と吉田氏に聞き、記録方法を聞いて、さらに興味は大きくなったそう。

チェキ日記の写真（松本氏は「写像」と呼ぶ）の一枚一枚に、まず魅力がある。それを松本氏は「特別な出来事ではない日常性そのもの」あるいは、誰もが一度は見た風景や、誰もが一度は写真の中の人と同じことをした、そのような何かが写っている、と表現する。日常風景を撮影した映画フィルムのような「任意のひとこま」のようなもの。日常性のなかの日常性と言えるかもしれない。あくまで私的な吉田家の家族写真なのに、自分自身の過去がそこに写っているような気さえる。一瞬を捉え、この一枚しか存在しないという意味で、強い唯一性（此性）を備えている写真なのに、むしろ普遍的な魅力がある。そんなチェキ日記に惹きつけられた松本氏は、この写真を「本」にすることを考えた。

だが、ここに問題がある。チェキ日記の魅力は、一枚一枚の写真だけでなく、写真を日々撮りつづけるアルバム化するという「営為」にも（にこそ？）あるからだ。「この1枚の写真」だけではない。「チェキ日記」という持続的な記録行為、あるいは方法自体にも、唯一性があるのである。そしてさらに、独自のメディアとしての、モノとしての唯一性を備えた一冊一冊の「チェキ日記」（松本氏は、チェキ日記には吉田氏の造形作家的な作家性が見



1.



3.

1. 展示風景
2. チェキ日記全116冊および、制作途中のチェキ日記写真（どちらも接触可）
3. チェキ写真の拡大プリント
4. チェキ写真（日付が記録されておらず、いつの写真かわからなくなったもの）



2.



4.

られるという。繰り返される営為の痕跡として結実するところにチェキ日記の魅力があるとすれば、それをどのように、さらなる複製物としての「本」に転換しうるのであるか？ そもそもチェキ日記を作品だと考えていなかったという吉田氏と、その価値をなんとか世に伝えたい松本氏は、芸資研に相談を持ちかけ、今回の研究会につながった。

吉田氏・松本氏と芸資研の石原教授・佐藤が相談した結果、「研究展示」を行うことにした。来場者たちと積極的に対話し、実験的な展示活動を通じてチェキ日記を公にする方法を探求するのである。展示を研究の場にもする「研究展示」という手法は、芸資研にとっても初めての試みだが、展示スペースと議論の場が隣接する芸術大学ならではの活動とも言える[写真1]。

実際の展示では、「写真作品」なら決してしないだろうことを色々試みた。写真を加工して展示したり（文字のみ／写真のみの2バージョン、どちらも日付なし）、極端に拡大してプリントしたり、現時点でのチェキ日記全

116冊を実物展示する（来場者は、実物を自由に手にとってよい）などである[写真2～5]。

本についても実験的に数パターンを制作し、来場者に手に取っていただき感想を聞いた。現物のチェキ日記をかぎりなく模倣した複製バージョン、写真集の体裁にレイアウトしなおしたダミーブック、チェキ日記の全ページを見開きで撮影した写真のプリントアウト山積み（約4000枚）などである[写真6～8]。

新型コロナウイルス感染症の流行と会期が重なったこともあり、来場者を予約の上で1日10名に限定したが、結果的に吉田氏や松本氏と来場者との豊かで濃密な対話が生じたのはとてもよかったと思う。「作品」でも「資料」の展示でもない「研究展示」という方法は新鮮で、来場者からも好意的な反応が少なかった。

アーカイブ研究会は、展示期間の最終日前日に研究展示の成果をふまえて行なった。チェキ日記の魅力やチェキ日記という方法のメディア論的な特徴だけでなく、私的な記録を公的な作品にする際の論拠や、写真メディ



5.



6.



7.



8.

5. チェキ写真を加工し、①コメントのみ、②写真のみにしたページの拡大写真
6. 複製本（現物の形態をかぎりなく模倣した複製物。複製した写真を貼り付けている）
7. ダミーブック（数十枚の写真からなる通常の写真集の形態にした本）
8. 全ページのプリントアウトおよびフラッシュカット映像（チェキ日記の全ページを印刷したものと、1見開きを0.2秒で積み重ねた映像）

(撮影：吉田亮人)

てもいい。チェキ日記における「営為」の次元を重視し、選択された写真が不可避免的に巻き込まれていく「物語」への回収を避けたいなら、「評価選別あるいは編集という行為をいかに避けて本を作るか」という難題を解決しなければならない。最終的に印刷される写真が4000枚から「選択」されたものではなく、チェキ日記という持続する記録活動＝アーカイブの一部であることが、パフォーマンスに示されていないはずである。

そのためには、完全に同一な複製物を流通させる「本」というプラットフォームのあり方自体を変える必要があるかもしれない。そもそも、なぜすべての本は同一でなければならないのだろう。たとえば、写真の選択が一冊一冊ランダムに行われ、結果として内容が別々なのに、同じ書物であることを主張するような本はどうだろう。製本される瞬間ごとに、新たに最新の内容がつけ加えられ、成長していく本は？ 写真が貼られておらず、購入者が自分でチェキ日記を作るための「本」は？ チェキ日記とその「本」の関係は、データベースのデータとその出力形態のようにも思えてくる。そうしたことを、チェキ日記は考えさせてくれるのである。（佐藤知久）

ア史におけるチェキフィルムの独自性、社会的な時間と私的な時間など、重要な論点の提起がいくつもなされた。議論は現在も継続中で、いずれどこかで、チェキ日記に関する議論の詳細を公開できると思う（研究会自体については、芸資研のYouTubeチャンネルに近日中に公開される記録動画を参照していただきたい）。

最後に一点私見を述べる。チェキ日記を本にする際の最大の問題は、写真の選択、つまり「編集」（あるいは「評価選別」）行為に関わるとわたしは考えている。チェキ日記はそもそも、写真を直感的・感覚的に撮影し、できるだけ再編集する視線を介入させず記録活動を継続することを意味している。一方で、写真集とは選択行為の結果そのものである。それはある視点から行われる「収集」だと言っ

よりあいのまとめ

アーカイブ研究会

- 1 | **写真とアーカイブ：旅行写真、鉄道写真を例として**
佐藤守弘（京都精華大学デザイン学部教授）
2014年6月25日
- 2 | **それってテクノロジーと何の関係があるの？**
バーバラ・ロンドン（キュレーター）
2014年8月2日
- 3 | **記憶／記録／価値 ミュージアムとアーカイブの狭間で**
平芳幸浩（京都工芸繊維大学美術工芸資料館准教授）
2014年9月30日
- 4 | **ダイアグラムと発見の論理 アーカイヴに眠る『思考のイメージ』**
田中 純（東京大学大学院総合文化研究科教授）
2014年10月31日
- 5 | **アーティストはいつか作品を作るのをやめ、資料を作り始めている**
田中功起（アーティスト）
2014年12月8日
- 6 | **チェルノブイリ・ダークツーリズムの実践から**
東 浩紀（思想家・作家）
2014年12月17日
- 7 | **映画『ASAHIZA 人間は、どこへ行く』上映＋トーク**
藤井 光（映画監督・美術家）
2015年1月19日
- 8 | **唯一のひとつを集積すること**
笠原恵実子（作家）
2015年4月24日
- 9 | **文化の領野と作品の領野 アーティファクトとしての視覚文化**
石岡良治（批評家）
2015年10月23日
- 10 | **映像民族誌とアーカイブの可能性 記録映画『スカラ＝ニスカラ〜パリの音と陶酔の共鳴〜』上映＋レクチャー**
春日 聡（美術家、映像・音響作家、映像人類学研究者）
2015年12月8日
- 11 | **歴史をかきまわすアーカイブ 黒ダライ児（戦後日本前衛美術研究者）**
2016年1月18日
- 12 | **不完全なアーカイブは未来のプロジェクトを準備する**
奥村雄樹（アーティスト、翻訳家）
2016年2月23日
- 13 | **インターローカルなアーカイブの可能性**
川俣 正（美術家）
2016年7月22日
- 14 | **ものが要請するとき加速する**
木村友紀（美術家）
2016年10月27日
- 15 | **アール・ブラウン音楽財団—理念、記録、プロジェクトとアクティビティ**
トーマス・フィヒター（アール・ブラウン音楽財団ディレクター）
2016年11月30日
- 16 | **IT IS DIFFICULT**
アルフレッド・ジャー（アーティスト、建築家、映像作家）
2017年4月25日
- 17 | **エイズ・ポスター・プロジェクトを振り返る**
小山田 徹（美術学部教授）、佐藤知久（芸術資源研究センター准教授）、ブブド・ラ・マドレーヌ（美術家）
2017年5月17日
- 18 | **5叉路**
前田岳究（アーティスト）
2017年6月21日
- 19 | **1960～70年代に見られる芸術表現の研究拠点形成と資料アーカイブの構築**
伊村靖子（情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 講師、国立新美術館客員研究員）
2017年12月9日
- 20 | **Week End / End Game: 展覧会の制作過程とその背景の思考について**
田村友一郎（アーティスト）、服部浩之（キュレーター）
2018年1月11日
- 21 | **コミュニティ・アーカイブをつくらう！ せんだいメディアテーク「3がつ11 にちをわすれないためにセンター」奮闘記**
甲斐賢治（せんだいメディアテークアーティストック・ディレクター）、北野 央（公益財団法人仙台市民文化事業団 主事）、佐藤知久
2018年9月28日
- 22 | **NETTING AIR FROM THE LOW LAND 空を編む—低い土地から**
渡部睦子（アーティスト）
ライブ・パフォーマンス | MAMIUMU
2018年10月4日
- 23 | **日本の録音史（1860年代～1920年代）**
細川周平（国際日本文化研究センター教授）、古川綾子（国際日本文化研究センター助教）
2018年10月11日
- 24 | **特集展示「鈴木昭男 音と場の探究」をめぐって**
奥村一郎（和歌山県立近代美術館学芸員）、鈴木昭男（サウンド・アーティスト）
2018年12月16日
- 25 | **シリーズ：トラウマとアーカイブ vol.1 | 『シャンデリア』自作を語る—近代歴史の中で生き残った人々の話から**
衰 相順（美術作家）
2019年10月8日
- 26 | **シリーズ：トラウマとアーカイブ vol.2 | parallax (視差)—「向こう側」から日本を見る**
高嶋 慈（芸術資源研究センター非常勤研究員）
2019年10月24日
- 27 | **シリーズ：トラウマとアーカイブ vol.3 | このまえのドクメンタって結局なんだったのか？**
石谷治寛（芸術資源研究センター非常勤研究員）
2019年12月17日

- 28 シリーズ：トラウマとアーカイブ vol.4 | ロマの進行形アーカイブとしてのちぐはぐな住居

岩谷彩子（京都大学大学院人間・環境学研究科准教授）
2020年2月18日

- 29 シリーズ：デジタル時代の〈記憶機関〉vol.1 | デジタル時代の記憶機関—イントロダクション

佐藤知久
2020年10月16日（オンライン配信）

- 30 シリーズ：デジタル時代の〈記憶機関〉vol.2 | プラットフォームとしての図書館の役割 コロナ禍で露呈した物理的な公共空間としての弱さ

佐々木美緒（京都精華大学人文学部准教授）
2020年10月28日（オンライン配信）

- 31 シリーズ：デジタル時代の〈記憶機関〉vol.3 | 美術館の資料コレクションは誰のもの？

松山ひとみ（大阪中之島美術館学芸員・アーキビスト）
2020年11月10日（オンライン配信）

- 32 シリーズ：デジタル時代の〈記憶機関〉vol.4 | 世界劇場モデルを超えて

桂 英史（東京藝術大学大学院映像研究科教授）
2020年11月16日（オンライン配信）

- 33 360° 展覧会アーカイブ事業「ART360°」の実践を通じた考察

辻 勇樹（Actual Inc.代表取締役／ART360°ディレクター）
2020年12月18日（オンライン配信）

- 34 「失われた絵画とアーカイブ 宇佐美圭司絵画の廃棄処分への対応について」

加治屋健司（東京大学大学院総合文化研究科教授、東京大学芸術創造連携研究機構副機構長、京都市立芸術大学芸術資源研究センター特別招聘研究員）
2021年6月21日（収録）、7月21日（配信開始）

- 35 吉田亮人チェキ日記展と第35回アーカイブ研究会

吉田亮人（写真家）、松本久木（松本工房代表、グラフィックデザイナー）
展示 | 2021年8月24日～29日
会場 | 京都市立芸術大学 小ギャラリー研究会 | 8月28日（オンライン配信）

特別授業

- 1 横盗り物語／ヨコハマトリエナーレに託すもの

森村泰昌（美術家）
2014年7月7日

- 2 [読めるものと読めないもの2] Artist Bookをつくる

塩見允枝子（音楽家、作曲家、芸術資源研究センター特別招聘研究員）
2014年11月21日

- 3 美術のウラ側にあるもの

彬子女王殿下（芸術資源研究センター客員研究員・特別招聘研究員）
2014年12月12日

- 4 3.11後に企画した展覧会とプロジェクト あいちトリエンナーレ2013を中心に

五十嵐太郎（東北大学大学院工学研究科教授）
2015年6月8日

- 5 フルクサス パフォーマンス・ワークショップ～実演を通してフルクサスを体験しよう～

塩見允枝子
2015年6月16日

- 6 国際展とキュレーション 今年のヴェネチア・ビエンナーレをふまえて

建畠 哲（多摩美術大学学長、芸術資源研究センター客員教授）
2015年7月23日

- 7 コレクションと芸術

彬子女王殿下
2015年10月7日、14日、21日、28日

- 8 壁画は何をうつすのか 法隆寺金堂壁画の模写を通して

彬子女王殿下
2016年12月8日

- 9 塩見允枝子「水を演奏する」2017

塩見允枝子
2017年11月17日

- 10 日本文化を考える～明治の選択～

彬子女王殿下
2018年12月5日、12日

- 11 塩見允枝子「時間と空間に分け入る」～フルクサス作品の演奏をとおして～

塩見允枝子

2019年10月30日

- 12 日本文化を考える

～令和からまなぶ～

彬子女王殿下

2019年11月27日、12月11日

- 13 日本文化を考える

～令和からまなぶ～

彬子女王殿下

2021年12月13日

講演会

- 1 | イタリア未来派 芸術の革命

ルチャーナ・ガリアーノ（音楽学者、音楽美学者）

2015年11月20日

- 2 | 伝統音楽における記譜について

藤田隆則（日本伝統音楽研究センター教授）

2016年2月17日

- 3 歴史的音源で検証するピアノ黄金期の音色「ショパンが弾いたピアノはどんな音色だった？」～直系の弟子達の歴史的録音で検証するショパンの実像～

梅岡俊彦（古典鍵盤楽器技術者、音楽学部非常勤講師）、松原 聡（ピアニスト、ピアノ史研究家）
2020年11月13日

- 4 歴史的音源で検証するピアノ黄金期の音色「ショパンが弾いたピアノはどんな音色だった？」～約百年前のピアノ銘器11種類の音色聴き比べ～

梅岡俊彦、松原 聡
2021年12月17日

レクチャーコンサート

- 1 | バロック時代の音楽と舞踏 記譜を通して見る華麗なる時空間

レクチャー | 柿沼敏江（音楽学部教授）、高野裕子（芸術資源研究センター非常勤研究員）、三島 郁（音楽学部非常勤講師）、赤塚健太郎（成城大学文芸学部芸術学科専任講師）
演奏 | 樋口裕子（バロック・ダンス）、永野伶実（フルート）、大内山薫（ヴァイオリン）、頼田 麗（ヴィオール）、三橋 梓子（チェンバロ）

日時 | 2015年10月18日

会場 | 京都市立京都堀川音楽高等学校音楽ホール

- 2 | 五線譜に書けない音の世界～声明からケージ、フルクサスまで～

レクチャー | 柿沼敏江、藤田隆則、竹内直（芸術資料研究センター非常勤研究員）、塩見允枝子
演奏 | 大井卓也（ヴォイス）、上中あさみ（打楽器・ベル）、北村千絵（ヴォイス）、佐藤 響（チェロ）、秦川晶子（電子ピアノ・トイピアノ）、鷹阪龍哉（声明）、橋爪皓佐（ギター）
美術 | 二瓶 晃

日時 | 2017年2月26日

会場 | 京都市立芸術大学ギャラリー@ KCUA

資料展示

- 1 | 古橋 侘二 (LOVERS—永遠の恋人たち) 展示・修復資料展示

日時 | 2016年7月9日-24日

会場 | 京都芸術センター 講堂（作品展示）、談話室（資料展示）

主催 | 京都芸術センター（作品展示）、芸術資源研究センター（資料展示）

- 2 | Sujin Memory Bank Project # 01 デラシネー根無しの記憶たち

日時 | 2016年11月12日-2017年2月19日

企画 | 林田 新（芸術資源研究センター客員研究員）、高橋耕平（アーティスト）
会場 | 柳原銀行記念資料館
主催 | 芸術資源研究センター、柳原銀行記念資料館

- 3 | シンポジウム「過去の現在の未来 2」関連展示

日時 | 2017年11月21日-29日
会場 | 兵庫県立美術館 アトリウム 1
主催 | 芸術資源研究センター、國府理「水中エンジン」再制作プロジェクト実行委員会、兵庫県立美術館

- 4 | 京都芸大「今熊野・岡崎学舎」井上隆雄写真展—もう一つの『描き歌い伝えて』—井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブ実践研究

日時 | 2018年2月7日-11日
企画 | 山下晃平
会場 | 元崇仁小学校 南校舎2F
主催 | 芸術資源研究センター
協力 | 小牧徳満（美術家）

- 5 | Akira Otsubo「Shadow in the House」

日時 | 2018年3月22日-31日

会場 | 京都市立芸術大学 小ギャラリー
企画 | 高嶋 慈
主催 | 芸術資源研究センター

- 6 | クロニクル京都 1990s—ダイヤモンド・アー・フォーエバー、アートスケーブ、そして私は誰かと踊る

日時 | 2018年10月6日-2019年1月20日

会場 | 森美術館
主催 | 森美術館
企画 | 椿 玲子（森美術館キュレーター）、石谷治寛
協力 | 芸術資源研究センター、ブブ・ド・ラ・マドレーヌ（アーティスト）、山中 透（ミュージシャン）、シモース 深雪（シャンソン歌手、ドラッグクイーン）、佐藤知久

- 7 | 崇仁小学校展：記憶のひきだし 見返りすうじん

日時 | 2020年3月20日-31日

会場 | 元・崇仁小学校
主催 | 京都市立芸術大学・崇仁小学校の記録と記憶を継承するプロジェクト
共催 | 崇仁自治連合会、崇仁発信実行委員会

- 8 | バシエ音響彫刻 特別企画展

日時 | 2020年11月7日-12月20日
会場 | 京都市立芸術大学ギャラリー@ KCUA

主催 | 京都市立芸術大学
企画 | 芸術資源研究センター バシエ音響彫刻プロジェクト
共催 | 東京藝術大学ファクトリーラボ
協力 | 大阪府、万博記念公園マネジメント・パートナーズ（BMP）、ナルセロナ大学、L'association Structures Sonores Baschet（フランスバシエ協会）、バシエ協会（日本）

- 9 | 柳原銀行記念資料館2020(令和2)年度企画展「夢の新幹線、苦闘の住宅建設運動～自主映画『東九条』の世界3～」

日時 | 2021年3月3日-31日
会場 | 柳原銀行記念資料館
主催 | 京都市、柳原銀行記念資料館運営委員会
協力 | 芸術資源研究センター 崇仁小学校を忘れないためにセンター

- 10 | 井上隆雄「インド・ラダック仏教壁画」資料展—井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究—蘇る天空の密教図像

日時 | 2021年3月23日-28日

会場 | 京都市立芸術大学 小ギャラリーー及びWebサイト

主催 | 芸術資源研究センター 井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究

協力 | 芸術資源研究センター
助成 | DNP文化振興財団 グラフフィク文化に関する学術研究助成

シンポジウム

- 1 | 創造のためのアーカイブズ Part1 未完の歴史

森村泰昌（美術家）、塩見允枝子（音楽家）、加治屋健司（広島市立大学芸術学部准教授）、石原友明（美術学部教授）、加須屋明子（美術学部准教授）

日時 | 2012年10月7日
会場 | 京都市立京都堀川音楽高校 音楽ホール

- 2 | 創造のためのアーカイブズ Part2 物質と記憶

下條信輔（カリフォルニア工科大学教授）、篠原資明（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）、建畠 哲（京都市立芸術大学学長）、高橋 悟（美術学部教授）

日時 | 2012年11月7日
会場 | 京都芸術センター フリースペース

- 3 | 富本憲吉のこぼれ

乾 由明（元兵庫陶芸美術館館長）、前崎信也（立命館大学専門研究員）、森野泰明（陶芸家、日本藝術院会員）、柳原睦夫（陶芸家、大阪芸術大学名誉教授）、山本茂雄（富本憲吉文化資料館館長）、森野彰人（美術学部准教授）

日時 | 2013年12月1日
会場 | 京都国立近代美術館 講堂

- 4 | 京都市立芸術大学芸術資源研究センター開設記念シンポジウム

井上安寿子（京舞井上流）、建畠 哲、門川大作（京都市長）、中村三之助（京都市会議長）、金剛龍護・宇高竜生・宇高德也（能楽金剛流シテ方）、京都市立芸術大学能楽部、藤田隆則（日本伝統音楽研究センター教授）、石原友明、柿沼敏江（音楽学部教授）、加治屋健司（芸術資源研究センター准教授・専任研究員）、鷲田清一（哲学者、大谷大学教授）、定金計次（美術学部教授・芸術資源研究センター所長）

日時 | 2014年 年7月1日
会場 | 京都市立芸術大学 講堂

5 | 来たるべきアート・アーカイブ 大学と美術館の役割

建島 哲、青木 保 (国立新美術館館長)、石原友明、川口雅子 (国立西洋美術館情報資料室長)、谷口英理 (国立新美術館情報資料室アソシエイトフェロー)...

6 | ほんまのところはどうなん、「アーカイブ」～初心者にもわかるアーカイブ論～

石原友明、加治屋健司、加須屋明子、佐藤守弘 (京都精華大学デザイン学部教授)、林田 新 (芸術資源研究センター非常勤研究員)、森村泰昌

7 | 過去の現在の未来 アーティスト、学芸員、研究者が考える現代美術の保存と修復

山梨俊夫 (国立国際美術館館長)、石原友明、植松由佳 (国立国際美術館主任研究員)、金井 直 (信州大学人文学部准教授)、マルティ・ルイツ (サウンド・アーティスト)、パルセロナ大学美術学部研究員)、加治屋健司

8 | メディアアートの生と転生 保存修復とアーカイブの諸問題を中心に

石原友明、高谷史郎、加治屋健司 (芸術資源研究センター特別招聘研究員)、東京大学大学院総合文化研究科 超域文化科学専攻教授)、久保田晃弘 (多摩美術大学美術学部教授)、畠中 実 (NTTインターコミュニケーション・センター学芸員)、松井 茂 (情報科学芸術大学院大学准教授)、佐藤守弘

9 | 古橋倭二《LOVERS—永遠の恋人たち》をめぐるトークイベント

阿部一直 (山口情報芸術センターキュレーター/アーティストック・ディレクター)、石谷治寛、石原友明、住友文彦 (キュレーター/アーツ前橋館長)、高谷史郎 (アーティスト)、建島 哲 (京都芸術センター館長)

10 | 過去の現在の未来 2 キュレーションとコンサベーション その原理と倫理

石原友明、遠藤水城 (インディペンデント・キュレーター)、白石晃一 (アーティスト)、フアラボ北加賀屋)、高嶋 慈、相澤邦彦 (兵庫県立美術館保存・修復グループ学芸員)、加治屋健司、田口 かつり (東海大学創造科学技術研究機構特任講師)、中井康之 (国立国際美術館学芸課長)、小林 公 (兵庫県立美術館学芸員)、飯尾由貴子 (兵庫県立美術館企画・学芸部門マネージャー)

11 | フルクサスを語る

柿沼敏江、一柳 慧 (作曲家)、塩見允枝子、建島 哲 (美術評論家、多摩美術大学学長)、井上明彦 (美術学部教授)

12 | シンポジウムとコンサート「糸が紡ぐ音の世界」

伊藤 悟 (国立民族学博物館外来研究員)、井上 航 (国立民族学博物館外来研究員)、滝 奈々子 (芸術資源研究センター非常勤研究員)、谷 正人 (神戸大学)、藤野靖子 (美術学部教授)、佐藤知久 (芸術資源研究センター准教授)、柿沼敏江、藤枝 守 (九州大学芸術工学研究院教授)

13 | デジタル時代の〈記憶機関〉—芸術／大学における図書館・美術館・アーカイブ

桂 英史 (東京藝術大学大学院映像研究科教授)、佐々木美緒 (京都精華大学人文学部准教授)、松山ひとみ (大阪中之島美術館学芸員・アーキビスト)、森野彰人 (芸術資源研究センター所長・美術学部教授)、佐藤知久 (芸術資源研究センター教授)

14 | 富本憲吉『わが陶器造り』

Meghen M. Jones (アルフレッド大学准教授)、鈴木禎宏 (お茶の水女子大学生活科学部准教授)、前崎信也 (芸術資源研究センター客員研究員、京都女子大学生生活造形学科准教授)、森野彰人

ワークショップ

1 | 「リユート・タブラチュアの記譜法を考える—鳴ると記すのあわい」

笠原雅仁 (古楽器奏者、声楽家)、岡田加津子 (作曲家、音楽学部教授)、三島 都 (音楽学者、音楽学部非常勤講師)

(2022年3月7日現在)

芸術資源研究センター

スタッフ一覧

(2022年3月31日現在)

Table listing staff members and their roles: 所長 (森野彰人), 副所長 (武内恵美子), 専任研究員/教授 (佐藤知久), 非常勤研究員 (北浦雄大), 客員研究員 (石谷治寛), プロジェクト・リーダー (山下晃平), 客員教授・特別招聘研究員 (森村泰昌), 事務局 (岡本 葉).